

今治明德短期大学 研究紀要

第3集

目 次

人格鑑別の点晴	西村 貫一	1
認識の弁証法をめざす学習過程の構造	武田 正浩	13
EQUALITY, LIBERTY, AND DEMOCRACY	奥田 尊睦	27
ゼラチン調理の研究(第1報)	丹下ナホエ 村上 久美	43
経済成長からみた米の生産調整による 米質向上と消費の動向について(第1報)	真木 胖	49
西ノ岡焼の研究(下)	永田 政章	63

昭和45年12月

今治明德短期大学

人 格 鑑 別 の 点 睛

西 村 貫 一

今治明德短期大学

A Finishing Touch on Personality Understanding

Kanichi NISHIMURA

Imabari Meitoku Junior College

はじめに

人格鑑別の点睛というのは、他人を理解することについての筋金いれという意味である。ながいあいだ、先人が、このことについて苦心して残してくれた業績に、おこがましいことではあるが、あらためて魂をいれるということである。というのは、このことについては、せっかくの骨折にもかかわらず、いまだにこれといった決め手が擱まれているからである。たとえば、米国の人格心理学者ボンナー (Bonner) でさえ、人格のとらえ方について、

「人格を量的に説明することには科学的な証拠があげられてはいるが、人格はどのようにして統一されているかということになると、いまだに信頼するに足るほどの説明は与えられてはいない。また統計的、階乗的および実験的な方法をいかように活用したところで、それらはあまりにも未熟であるから、人格のそうした内部的心理学的組織を見抜くことはできない。そこで人格の統一性を明らかにするには、どうしても主観的に全体性をとらえるよりはかに途はない。」

といっているほどであるからである¹⁾。

わたくしとしても、心理学徒として、ながいあいだ、他人を理解しなければやってゆけない仕事にたずさわってき、その間、ご多分にもれず、量的、統計的方法はいうに及ばず、全体観の立場などから、このことを検討するなど、暗中模索のうちに馬齢を重ねて今日に至ったものである。しかし、こうした苦悩の淵にあえぎながらも、ほのかではあるが、わたくしなりに、ある目安が固りかかっていないでもない。杜撰なものではあるが、墓碑銘の代りに、あえて発表に踏みきった次第である。ご批正を賜われれば幸甚である。

なお、本稿は、昭和34年、わたくしが甲府少年鑑別所在勤のおり、甲府地方検察庁天野武一検事正の要請によって、検察官や検察事務官の研修に用いた講案にその端を発するものである。この機会に天野先生（現大阪高等検察庁検事長）に深甚の謝意を表するものである。

1. 一步退いてみる

その第一の用心は、己れを空にすることである。我欲、我執をすてて他人を認識するという態度を堅持することである。公平無私、虚心坦懐、白紙のような心になることである。

佐藤一斎が「言志録」において、

「愛憎の念頭、最も藻鑑を累はす。」

といているように、色眼鏡をはずして、「心眼」を開くことを要件とする。かつて札幌少年鑑別所長時代に、鑑別課長の部室に、この文字を扁額として掲げておいたことがある。

孔子は、「論語」において、このことを「君子は周して比せず。」といているが、この境地への途は、けっして容易なものではない。道元は、それへの途を、「正法眼蔵随聞記」において「只管打坐」であるといっている²⁾。そうした自己修練が人間鑑別に際っての先決問題であり、そうした修練をつむことによって、はじめてわれわれは、ひとを観ることができるようではなからうか。他人を理解することは、けっして小手先のことではないからである。ルソオが、その著「エミール」のなかで、「教師たる前にまず人間であれ。」と叫んだことばが思い出される。

さらに、ひとを観ようとする態度や素振りまでも、これを放棄するものでなくてはならない。

「我れ人を観んと欲しなば、則ち人卻って我れを観る。我れ人をして我れを観しめんと欲しなば、則ち人我れを観る能はずして、而も我れは卻って人を観る。感応の機是の如し。」

と「言志録」にある。自ら専門家をもって任じているひとが、かえってこのような轍を踏むことがありはしないだろうか。たとえば、児童、生徒、学生または父兄などはいうに及ばず、非行少年、被疑者や被告人に至るまで、己れが鑑別されるさきに、鑑別する側のひとを、あべこべに鑑別して、そうしたひとに対しての処し方を用意していることの多いことを、わたくしは躬をもって経験している。かの有名な判官、大岡越前守忠相が、大きな毛抜を用意していて、あごのひげを抜きながら訴を聴いたという物語が残っているが³⁾、これなど、己れを空にすると同時に、「我れ人をして我れを観しめんと欲した」ことを裏書きするものではなからうか。よく「大賢は愚の如し。」といわれるが、このような境地にあることを「宝鏡三昧」には、

「愚の如く魯の如し、ただよく相続するを主中の主と名く。」

といている。この境地にいたって、はじめてわれわれは、真にひとを観ることができるのではなからうか。

2. 初印象にとらわれない

世間には、初印象を重宝がるひとが少なくはない。しかも、なまじ教養をつんできると自負しているひとに多く見うけられる現象である。しかし、これほど危険なことではない。八卦と同じで、あたることもあれば、あたらぬこともある。かつて米国のホーリングワース (Hollingworth) が、12名の管理者に、27名のセールスマン志願者を初対面で品等させ

た結果を発表したものがあがるが、当時学生であったわたくしは、この報告をみて、初対面というものが、ひとを観ることに、いかに大きな誤差（あるひとが1番としたものが27番であったりした）があるかに、驚愕と恐怖をさえ禁ずることができなかったものである⁴⁾。

また道元が、「衆寮箴規」において、

「面を見て人を測るは癡の甚なり。」

といったことには深い意味がある。初印象は、そのままにしておけば、先入主となり、それが、生理学的には、大脳皮質のなかに痕跡として保持せられ、しまいには偏見となって、こびりついてしまうことがあるからである。

板倉周防守重宗は、訴を聴くのに、障子を隔てて茶を^{きし}碾ったという故実がある⁵⁾。判官として、訴人の容貌、振舞など外見にとらわれないための用心であり、かつ、己れを空にするための深慮に出でたものであったかと頭の下る思いがする。このことについては、不肖わたくしも、ながいあいだ、非行少年の鑑別や家庭裁判所の家事調停の実務において、数多くの事例に接しているものである。

だからといって、初対面といえども、あながちこれを捨て去るべきものではない。見識の高いひと、多くの経験を積んだ明眼のひとであれば、「言志録」にいう、

「初見の時に相すれば人多く違はじ。」

であるかも知れないからである。迷を生じないからであろう。ともかく佐藤一斎ほどの達眼の人にして可能な提言とみるべきではなからうか。また、ある特殊な事柄に関連して、その道のエキスパートが、その道のひとを観る場合には、あてはまることもあるであろう。

したがって、初印象は、これを無価値なものとして無視すべきものではない。それは、それとして、一応、空にしておき、更めて他のさまざまな観点から、これを眺めなおし、それらを比較勘案して、最後の断案をおろすべきである。あえて、「とらわれない」といった表現を用いた所以である。

なお、とらわれない、とはいうものの、せつかく、ほんとうのものを掴みながら、「ひとを見たら泥棒と思え。」といったような、猜疑心すなわち罔つ引き根性にとりつかれることも慎まなくてはならない。要は、初印象は、人格鑑別にあたっては、見のがせないものではあるが、それを他の観点から裏付けることが、いかに意義あることであるかに意を用いたいものである。

3. かかりあってみる

一歩退いてみる、ということは、かかりあうなということではない。心理学の用いる実験も、テストも、そして問診（質問紙法を含む）なども、すべてかかりあってみることにほかならない。単にひとの行動を外から観るだけでは足りない。ひとは、かならずしも見かけにはよらないものであるからである。たとえば、矯正界などでは、「よき囚人かならずしも、よき社会人にあらず。」という言葉が、仮釈放に対する警告として用いられているほどである。孔子が、「論語」において、「巧言令色鮮きかな仁。」といい、また「剛毅朴訥は仁に近し。」といているのも、外見や動作だけでは、あてにならないことを示唆したものというべきであろう。事実わたくしは、身だしなみや風采がよく、かつ言葉遣

の丁寧なひとに、詐欺師の多いことを目撃することしばしばであった。

そこで、佐藤一斎も、その晩年の著述、「言志叢録」において、

「人を観るには、徒らに外其の容姿に拘はること勿れ。須らく之をして言語せしめ、就きて其の心術を相すべくは可なり。先ず、その眸子を観、又其の言語を聴かば、大抵瘦す能はじ。」

といっただけありあつてみることを強調している。

かかりあいの手段としては、心理テストや問診などのほかに、わざわざ相手を怒らせて、その反応をみたり、なにか特別な仕事をさせたりするもの、または臨済禅において用いられる公案などのように、解答の困難な質問をぶつけて観るようなこともある。

さらに、相手を切羽詰った窮地に追い込んでみる臨界観察といったものがある。このことは、恩師故小野島右左雄先生が唱えられたことであるが、しかし、それを行なう場合にはともすれば、人権を侵害するような破目に陥る恐れなしとしない。くれぐれも心して実施すべき事柄である。

このように、かかりあうことには、さまざまな方法があるが、それを用いる場合には、それぞれの方法の長所短所をよくみきわめるばかりでなく、その方法に関しては、自信をもてるほどに熟達することにつとめなくてはならない。下手に用いれば、子どもの火遊びに墮する恐れがあるからである。また、世間には、往々にして、目さきのきく際物ぐいといった類のひとがあつて、ある方法が案出されると、直ちにそれに食いつき、しかもそれを唯一無二のものとして使用して、得々としているものがある。慎重に扱ってほしいものである。だからといって、新しく工夫された方法といえども、これをむげに顧みないでいることも考えものである。せめて、一応は、検討してもらいたいものである。

4. 行動は、場面関連においてみる

かかりあつてみる方法の一つとしてのテスト法が、わが国に導入された大正末期から昭和の初頭にかけては、これまでに行なわれていた行動観察などは、客観性のないものとして、教育界からは葬り去られたかの状態におかれたものである。しかし、ウェルトハイマー (M. Wertheimer 1880~1943) を先鋒とするゲシュタルト心理学⁵⁾ が台頭するにつれて、在来の行動観察も衣替をして学界に出るようになった。前項にあげた臨界観察法もその一つのあらわれである。1931年頃であつたか、ゲシュタルト心理学を、ベルリン大学で講じていたレヴィン教授 (K. Lewin 1890~1947) が、わが東京教育大学 (当時は、東京文理科大学と称した) の心理学会で講演されたあとの座談会で、行動観察についてのわたくしの質問に答えて、教授は、一例をあげて観察の仕方について具体的に説明してくれたことがある。すなわち、ひとりの対象者が、どのような背景 (場面) では、どのような行動をとったかを逐一記録してゆき、それを資料として理解すべきである、といったことがあつたがこれは、レヴィンと親交の厚かった小野島教授が唱えられた位相観察法のことであつた。

ところが、世間には、ひとりの一つの行動だけを、状況から切り離してみようとするひとがある。しかも、このようなことは、さきにも触れたように、なまじ経験を積んだひとに往々にして見うけられることで、まことに危険千万なことである。

ゲシュタルト心理学にあつては、さらに視点をかえて、人間の記憶、想起、想像、思考ま

たは知覚体験等に至るまで、あらゆる行動は、場面構造によって差異を生ずるものであり、そうした場面構造が明らかにされない限り、その真相はつかめないことを実証している⁶⁾。

このことに関連して、フランスの父とまで仰がれた、かのユーゴー (V. Hugo 1802-1862) は、*レ・ミゼラブル* (*Les Misérables*, 1862) という不朽の名作を残して、犯罪者に対する人間的な処遇の必要性を鼓吹し、またイギリスの作家ゴールズワージー (J. Galsworthy 1867-1931) が、*ジャスティス* (*Justice* 1910) を著して、犯行の動機を無視した量刑や監獄制度の改善につくしたことは有名である。さらに、わが大岡越前守忠相が、江戸城のお堀で、禁制の鴨を捕えて父の病をなおそうとした孝行息子の被疑者を、本来ならば、死刑に処すべき罪であるにも拘らず、巧みな方便を用いて釈放したことなど心あたたまる事例が残されている。ちなみに、この裁判は、法の問題をいかにして生かすべきかということについての判官としての正しい在り方を指示してくれたものとして刑事学においても、きわめて貴重な資料を提供するものと思われる。

また、今日、わが国における刑事事件などが手間どっていることについては、とかくの論議のあるところではあるが、しかし、それは人手不足にもよろうが、刑罰を杓子定木に犯行にあてはめて結末をつけるといった非人間的な措置をさせて、あくまで被告人などの行動によって来たる場面構造を明らかにし、もって民主社会にふさわしい法の在り方を生かすための労作によるものと解すべきではなかろうか。

なお、本項においては、主として法に関する事例に触れて説明したが、行動を場面関連においてみることは、人間関係のあらゆる位相においても、見のがすことのできない重要事項であることを忘れてはならない。

5. 行動の基本的動因をみる

近世における心理学の創始者といわれているヴント (W. Wundt 1832-1920) が、人格は、意識面にあらわれた事実を対象として科学的に研究されるべきものであることを主張してから、ながいあいだ、われわれの心理学は、内省心理学とか意識心理学の名をもって斯界を風靡したものである⁷⁾。このような流れに対して、真向から反対の烽をあげたわけではないが、その臨床的経験から、無意識的な動因が、ひとの行動を左右していることを指摘したのは、精神分析学の創始者フロイド (S. Freud 1856-1939) であった。1893年以来かれの発表した著作は、きわめて多方向にわたるものである⁸⁾から、これらを取上げることはできないが、その基本的な考想だけを要約すれば、ざっと次のようになるとと思われる。

行動の基本的動因には二つのものがある。一つは生への動因であり、他は死への動因である。生への動因をリビドー (Libido) といわれる。そして、このリビドーは、精神性欲の精力であって、死への動因とも互に深くむすびあっている。しかも、そうした動因は、不断は、意識面には現われず、無意識の層のなかにしまい込まれているというのである。

そこで内省心理学が全盛をきわめていた当時のことでもあり、加えて、フロイドが、既存の哲学、美学そして宗教なども、そうした動因の所産であると主張したことなどもあって、かれの説は、心理学界の総反撃をうけるに至った。

ところが、かれの同志であったユング (C. G. Jung 1876～) によって、リビドーを

心的エネルギー (Psychical energy) と改められるに至って⁹⁾、ようやく学界にも認められるようになった。また、かれのかつての同志であったアドラー (A. Adler 1870-1937) は、不適応行動の原因を、劣等コンプレックス (inferiority complex) とか劣等感 (feeling of inferiority) —この言葉は、劣等意識と間違えて使用されている—においた。すなわち劣等感とは、リビドーという動因が、外部的抑圧 (フロイドがよく用いた言葉である) によって、その捌け場を失うと、無意識の層のうちにコンプレックスとしてしまい込まれるものなのである。したがって、その発動は、意識的には優越感としてあらわれると発表した¹⁰⁾。しかも、この言葉は、その意味を曲解されながらも、今日では、心理学界、教育学会はいうに及ばず一般人の常識語にまでなっているから、すみやかに、その本来の意味にかえるようにつとめたいものである。

さらにフロイドは、このような無意識的動因説を基として、自由連想のテクニックをはじめとして、夢、舌の滑り、筆先の誤り、無意識的、意識的なレジスタンス等について、新しい人間理解の分野を開拓してくれているのである。また、ウィット、ユーモア、動機等における無意識の影響、個人心と集団心における無意識の作用、その他歴史、社会学、人類学から精神療法等に至るまで偉大な貢献をなしたのである⁸⁾。

かれの動因説は、アメリカにおいては、基本的欲求という概念で進展をみせ、生理的欲求、社会的欲求または人格的欲求と分類され、そのような欲求の挫折から新しい精神衛生が樹立されるに至っている。またドイツにあっては、K. ミュウラー (K. Müller) が、ひとの根本動因を、自己保存動因と種族保存動因との二つに分け、自己保存動因からは、栄養動因、活動動因、自己主張動因が生じ、種族保存動因からは超個人的動因としての群居欲、性欲、愛情欲等が生ずるといっている¹¹⁾。

以上、人格鑑別にあたっての具体的な事例をかかげることをさけて、行動の無意識的動因についての基本的なものを述べてきたが、それは、こうした考想が、わが心理学界にあっては必らずしもいまだ十分に理解されるに至っていないからである。要は、われわれが他人を理解するにあたっては、われわれの行動には無意識的な基本的要因があるから、それを力動的にとらえることの重要性を認識していただきたいものである。

6. 価値追求の方向をとらえる

これは、ひとの価値追求の方向をとらえてその人格を理解することである。このことは、前項にあげた基本的動因の発動が、価値追求の段階にまで至った時点において、これを理解するということもできるが、こうしたゆき方を主唱した E. シュプリンガー (E. Spranger 1882~) にとっては、人間自体が本来価値追求の存在であるとの立場からのものであった。かれは、ひとの価値追求の方向をもととして六つの生活形式すなわち理論人、経済人、審美人、社会人、政治人および宗教人の理想像を設定した。そして、それらのいずれにも倫理的価値のあることを認めた¹²⁾。

かれの心理学は、精神科学的心理学の創始者といわれる師、ディルタイ (W. Dilthey 1833-1911) の影響をうけたもので了解心理学といわれるものであり、われわれの人格鑑別にとっては、きわめて重要な役割をもつものである。しかも、人間を全体的かつ力動的に理解するという点からは、ゲシュタルト心理学や精神分析学ともその軌を一にするもので

ある。

わが国にあっても、誰の作かは審かではないが、

手を打てば鯉は出てくる鳥は逃げる下女は茶をくむ猿沢の池

という狂歌がある。おそらくシュプランガーの説よりもっと以前にものされたものであろうが、これは同じ刺激でも、これを受けとるひとの立場によって、その反応（行動）に差異のあることを歌ったものである。すなわち、われわれの追求している価値方向の差異によって、その行動には差異のあることを示唆してくれたものと解すべきである。ところで、このような点では、象牙の塔にこもって感覚の実験などに没頭している心理学者などよりも、むしろセールスマンの方が、相手が何を求めているかを見抜くつぽを心得ているかも知れない。

孔子が「論語」において、

「其の以てする所を視、其の由る所を觀、其の安んずる所を察すれば、人焉んぞ瘦さんや。焉んぞ瘦さんや。」

といっているが、表現は、きわめて簡潔ではあるが、その真意は、古今東西の心理学者の考え方のすべてを尽したものであるべきで、その識見の高邁さには驚嘆のほかはない。しかも、「其の安んずる所」というところに価値追求の焦点がある。そのひとの満足しているもの、安んじているものが何であるかを察することである。察するという文字を用いたことにもまた深い理由がひそんでいる。すなわち、そこに力動観がほのめかされているとみなければならない。

また、安んずる所の範囲は、そのひとの欲するものばかりでなく、楽しみとしているもの、そのひとの打込んでいる仕事、哲学、思想または宗教などにまで及ぶものであることを見のがしてはならない。このように考えてくると、ひとを観るには、いわゆる心理学だけの世界では足りない。もっと広い視野に立つべきことがのぞまれる。ひとを観ることの困難さは、このような点にもかかっていることを忘れてはならない。

7. 行動は全体の分節としてとらえる

孔子が、「其の以てする所を視る。」といったことは、人格鑑別にあたって、行動を重視すべきことを示唆したものと解さなくてはならない。しかし、その行動のとらえ方も、ワットスン (J. Watson 1872~1958) が、その初期の研究¹³⁾において発表したような、単に刺激に対する反応としてみるだけでは何等意味をもたないものである。そこでウェルトハイマーが、「全体は部分の総和ではない。」といったことは、行動のとらえ方に大きな変動を与えるものであった⁵⁾。また、レヴィンが指摘しているように、行動 (B) は個体 (P) と環境 (E) との函数すなわち

$$B = \Sigma (P, E)$$

によるものであるからである¹⁴⁾。なお、ワットスンを始祖とする行動主義心理学は、このようなゲシュタルト派の思想の洗礼をうけ、すっかり衣替えをして、今日では、アメリカ心理学の主流をなすに至っているものである。

それでは、全体の部分である一つの行動は、これを無視してよいかというに、けっしてそうではない。必要に応じては、さまざまな視点から、これを分析しなおしてみなくては

ならない。しかし、そのようにして分析した部分は、それだけでは意味をもつものではなくて、全体のなかの一分節であるという立場においてみなおすことによって、はじめて意味をもつものである。たとえば、ファというおとを聞いても、われわれには、何を意味するかは分らないが、それが音階の4であると説明されるならば、なるほどと合点のゆくように、全体の行動と関連させて、はじめてその行動の意味が理解されるものである。まして、分析した部分をとらえて、さきにも触れたように、一事が万事で片付けられては大変である。また、かりに腕をとらえて、筋、水分、血管、神経、皮膚または骨などに分析して研究することはできるが、それらを寄せ集めても、けっして腕という全体的なものは分るものではない。われわれの人格は、さまざまな性質が、一つの全体として成全されたものであるからである。ちなみに、わたくしは、1936年に、「個人は、いろいろの性質をもっているが、それが全く一つの全体をなし、他と関連しながら火花を散らして生活（ゲニタルト的思考を意味する）している独特の存在（内省心理学的思考を意味する）である。しかも社会を舞台として、そこに登場していると同時に、内在的な力（心的エネルギーを意味する）によって目的追求（価値追求を意味する）の活動を営んでいる（行動主義を意味する）ものであるから、個人に特有な統一された一つの全体的生活組織をさして、わたくしどもは、個性といふことができる。」¹⁵⁾と云って、人格を次のように定義づけたことがある。

「個性とは、個人に特有な統一的生活組織である¹⁵⁾。」

ともかく、わたくしは、このような広い視野に立って、力動的に人格は理解されなくてはならないことをこの機会にあらためて強調せずにはいられない。

8. 個人差を考慮する

ひとに個人差のあることについては、十人十色という言葉もあって、相当古くから知られてはいたようである。すでに中国の古典「管子」には「男女別有り」とあり、釈迦もまた差別のあることを説いている。しかし、そのことが心理学の重大関心事として取扱われるにいたったのは、あまり古いことではない。18世紀の終りから19世紀の初頭にかけて、イギリスのグリニッチ天文台において、星の運行速度を測定するにあたって、測定者によって測定値に誤差のあったことをもととして「個人方程式」がベッセルによって提唱されたことに端を発したものである。そして、今日では、差異心理学 (Differential Psychology) の名のもとに、ひとびとの間における差異が研究されている。つまり、知能、情意、学習、思考、記憶、想像、想起、知覚、運動機能などに、個人差のあることが研究されている。わが国にあっても、海外の影響をうけて、その事実を測定するための尺度も数限りなく標準化され実用に供されている。ことに職業にたずさわるものの性能の差異を測定する職業的適性検査や特殊能力の検査なども作成されている。しかも、それらの検査法は、他人理解にあたっての科学的方法として極めて高く評価されているものである。

ところが世間には、そうした個人差の強調は、いかにも人間が平等であるという思想に反するかのように思いこんでいる手合もないのではない。もとより生存権は平等であり、その人権を侵害することは許されないが、個人の権利を尊重し、その価値を実現させるために、その実体を握ることが先決問題であり、そのためには差別相を明らかにするより他に途はない。しかも、われわれが、他人を理解するというのは、この個人差の事実を理解

することを意味するものである。ちなみに、仏教にあっては、平等観を理想の彼岸とし、差別観を此岸の現実としており、現実を無視した理想は意味がなく、また理想を無視した現実も無意味であると説いているが、このことは、われわれに個人差の重要性を弁証法的に示唆するものといわなければならない。

また、世間には、自分の立場に固執して、人間にこのような差別のあることを取上げず、いたずらに他人を批判し勝なひとが少なくはない。ことに親が、その子を観る場合には、「茗荷畠も花ざかり。」のたてのように、何でもよく見えるものである。このことに対して、中国の古典「大学」には、

「人其の子の悪を知るは莫し。」

と指摘している。ともかく、これは、わが子可愛さのあまり、他所の子どもと比較してみることのできないこと、したがって、その個人差に気付かないことに帰因せられるものであろう。つまり、われわれが第1項においてあげた「愛憎の念頭、最も藻鑑を累はす。」ことのよい例というべきではなかろうか。ともかく、個人差の事実を観る態度を離れては、他人を理解することの出来ないことを、あらためて銘記したいものである。

9. 発達の段階を考慮する

70才の老母が、すでに分別盛りを過ぎて初老期にはいった50才の忤にむかって、朝の出かけに、

「今日は雨が降りそうだから傘をもっといで」

と注意している光景をみることもある。このことは、親子の間柄としては、まことにほほ笑ましいこととも受取れるが、ひとには、このように年齢による発達段階の差異に気付かぬままに、他人をみている場合が珍しくはない。ともかく、ひとには、同一の年齢であっても、その個人差に大きな開きがあるのに、さらにその開きを大きくしているものに、発達の段階による差異があるものである。したがって、このことは、個人差とひとまとめにして取上げるべき筋合のものではあるが、ことの重要性に鑑み、ここでは、一応これを切離して点晴を試みることにしたわけである。

われわれの心理学においては、発達心理学という一つの独立した分野があって、発達の段階について多くの業績を残してくれており、乳幼児期、幼時期、児童期、青年期、壮年期そして老年期などに分けて、それぞれの時期における特質を明らかにしてくれている。

しかし、折角このように発達の段階についての貴重な資料を心理学が提供してくれているにも拘らず、世間では、さきにあげた老いたる母親がその子に対すると同じような轍を踏んでいながら、自らはよく他人を理解していると思いこんでいるひとが少なくはない。また、そうした資料をもとに運営されるべき人間活動の各部門においても、ともすれば発達の段階は無視され勝である。すなわち、学校における教科課程の配列にしても、職場における新規採用者の訓練課程の樹立や職場配置等にしても、常套手段で片付けているようなことが多い。人格形成とか、能力の伸張といった観点から、あらためて見なおしたい事柄である。

しかし、ここにまたわれわれの用心すべき事柄が残されている。それは、何歳ぐらいのひとは、このような段階にあると規定されてはいても、それを鵜呑みにして、いずれのひ

ともそうだと思いつめてはならないということである。このことは至極あたり前のことではあるが、実際には、年齢段階できめつけて、他人を一つの枠にあてはめてみている場合が多いということである。そこで、一応そうした段階にはあっても、その裏には、さきにあげた個人差のあることを見のがさない考慮を払いたいものである。

なお、三つ子の魂百まで、ともいわれているが、それは、小さい時分によい養をすることが、将来の人格形成にきわめて大切なことであることを強調した諺であって、人間が何時までも、三つ子の魂であってはたまったものではない。人格は、毫礫しない限りは、百までも発達するものであることを、あらためて確認してほしいものである。

10. 家庭・環境を考慮する

「瓜の蔓に茄子はならぬ。」といわれるかと思うと、「氏より育ち。」ともいわれている。これらは、いかにも対立する見方のようにはあるが、いずれにも意味があるものである。ことに、人格形成という立場からなげめると、これらは、両々相俟って、はじめてその真価が発揮されるものといわなければならない。すなわち、ひとの現在おかれている姿態は、生得的なものに基盤はおかれてはいるが、その生い立ちや環境の影響をもまた甚大である。

ところが、世間には、初期のいわゆる科学的心理学がともすれば陥り勝ちであった素質観を、そのままに踏襲して、過去にこうであったから、将来もそうであるべきだといった宿命観にとらわれて、他人を理解しているひともし少なくはない。しかし、それは一方的な観方であって、それでは人間の真の姿を掴むことはできない。

今日の心理学にあっては、生得的な素質観を無視するものではなく、そうした基盤の上に、人格は、経験を積むこと、すなわち学習することによって変容されているものであるという立場がとられている。事実、経験の積み重ねなり、中国の古典「大学」にある如く

「湯の盤銘に曰く、苟に日に新にして日に日に新にし又日に新にす。」

るものにとっては、昨日の我は、もはや今日の我ではなくなっているからである。つまり、変容された別箇な人物になっているからである。また中国の古語に、

「三日書を読まざれば顔面に塵を生ず。」

というのがある。われわれは、読書によっても、その人相は変わるものである。つまり、修養することによって、その顔付はもちろん、人柄までも変わるものである。孟子は、このことを、

「胸中正しければ眸子あきらかなり。」

といっている。また、この事実は、フランスのアヴェロン森の野生児の物語によっても明らかにされているとおりである¹⁶⁾。

さらに、古人は、

「三日前の見をもって人を観ること勿れ。」

とも教えている。過去の見解にのみこだわることは危険である。だからといって、過去に行なったことが、将来を全然予見しないかというに、そうでない場合もあり得るのである。

いずれにもせよ、われわれは、孔子がいったように

「その由るところを観る。」

といったことの真の意図を考慮にいれて、慎重に他人を理解するようにつとめることを忘れてはならない。

む す び

ギリシャの昔、デルフォイのアポロン宮殿の柱には、

「汝自らを知れ。gnothi sauton (希)」

という文字が刻みこまれてあったと西洋哲学史は伝えている。わが兼好法師も、「徒然草」において、

「かしこげなる人も、人のうへをのみはかりて、おのれをばしらざるなり。我を知らずして外を知るといふことわりあるべからず。されば、おのれをしれるを、物しれる人というべし。」

といい、さらに佐藤一斎も、「言志録」において、

「彼れを知り己れを知れば百戦百勝す。彼れを知るは、難きに似て易く、己れを知るは、易きに似て難し。」

といって、己れを知ることの重要さと困難さを強調している。もとより、わたくしといえども、これらの提言に異論をさしはさむものではないが、しかし、己れを空にして他人を知ろうとつとめるものにして、はじめて己れをも知ることができるのではないかと考える。すなわち、すでに述べたように、己れを空にすることを先決問題として、他人を知ることにつとめるならば、われわれは、自ずと己れをも知ることができ、また己れの価値もこれを実現することができるのではあるまいか。

ともあれ、わたくしは、他我であれ、自我であれ、人間とは何かという問題と取組み、たとえそのことに悉尽的な解明にはいたらないまでも、しかく努力することによって、自己の生活を深めているのではないかと、自己をなくさめながら、今後もこのことに余生を捧げたい所存である。

註

- 1) H. Bonner. Psychology of Personality. 1961. p. 453.
- 2) 懷 奘 「正法眼藏隨聞記」
- 3) 穂積陳重 「法曹夜話」
- 4) H. L. Hollingworth, Judging Human Character. 1922.
- 5) M. Wertheimer. Experimentelle Studien über des Sehen. von Bewegung, Zts. f. Psych. 61. 1912.
- 6) K. Koffka. Principles of Gestalt Psychology. 1955. p. 45—56.
- 7) E. B. Titchener (1867~1927). Text book of Psychology, 1910.
- 8) S. Kahn. S. Freud and his work, Psychanalysis for Thirty Years 1955.
- 9) F. Fordham. An Introduction to Jungs Psychology. 1956. p. 19.
- 10) L. Way. Alfred Adler. An Introduction to his Psychology. 1950. p. 108, 110.
- 11) 木村禎司 心理学入門, 第4章衝動生活, 犀書房, 昭和38年。
- 12) E. Spranger. Lebensformen. 1921.

- 13) J. Watson. Psychology as a behaviorist view it, Psychological Rev. 20. 1913.
- 14) K. Lewin. Principles of topological Psychology. 1936.
- 15) 西村貫一 豊島区個性調査票手引, 昭和11年。
- 16) J. Itard. Rapports, et Mémoires sur le Savage de l'Averon. 1894.
(古武弥市訳「アヴェロンの野生児」牧書店, 昭和27年)

(昭和45年2月20日受付)

認識の弁証法をめざす学習過程の構造

武 田 正 浩

今治明德短期大学

The Structure of the Learning Process Aiming at the Dialectics of Recognition

Masahiro TAKEDA

Imabari Meitoku Junior College

序 課題考察の視座

我国における現代学習過程論の特徴は「認識の弁証法」を主題とするところにあると思われる。しかし私はそのことについて二つの観点より疑問をもっている。

その一つは教材構造論からの観点によるものであり、他の一つは認識の弁証法的展開過程からの観点による疑問である。なぜなら、前者については、学習過程における認識は大ざっぱに言えば、教師の意図する教材構造（目標・内容・方法）と学習者の思考との相互作用において成立すると考えられるのであるが、しかるに、教材構造を固定化して、「認識の弁証法」なるものを主張するからであり、後者については、認識の弁証法が成立するという主張はみられるが、その展開構造を明らかにした論稿は、私の知る限りでは全くの不毛だからである。

そこで、この論稿において認識の弁証法をめざす学習過程の構造を、教材構造論と認識の弁証法的展開過程論の側面より考察しようと思う。

なお、前者の視点については拙稿「教材構造論と弁証法」（今治明德短期大学紀要第2集）、後者の視点については拙稿「問題解決学習の再検討」（東京学芸大学大学院教育学研究室紀要創刊号）を再論考したものであることを付記する。

I 我国における現代学習過程論の弁証法の問題

1. 川合章の学習過程論にみられる弁証法の問題

川合章は、『教授学習過程』の中で、教育の過程は「社会過程であると同時に心理—生理過程である¹⁾」ということを強調し、そしてこの過程がいかにして可能になるかを、「認識対象の法則は同時に思考の法則である²⁾」という基本的な立場から解明しようとしている。彼は認識対象を弁証法的に、「自然も社会も、変化し発展しているもの、その変化、発展の法則をとらえ、その法則にそって働きかけることによって、変更できるもの³⁾」

ととらえ、社会の変化発展の法則を身につけさせることによって社会を変革できる能力の育成をめざしている。ここにおいて、教育はたんなる心理過程、論理過程ではなくて、同時に社会過程となるのである。つまり、子供の学習は、基本的には、学習対象についての子供の現在の考え方、感じ方を前提にし、それに何らかの形で教師がメスをいれることによってすすめられるが、この子供の現在の考え方や感じ方は、いわば現実の社会過程の中に子供がおかれている位置や、社会でのさまざまな影響によって大きく規制されてきている。それだけでなく、そのような子供の現状に何らかの変革的影響を加え、しかも、実践にまで高めようというのだから、大きくみれば、教育の過程は、現実の社会過程そのものへの教育の側からするチャレンジだともいえる。このような観点から教育実践を検討するときの中心問題は、学習における子供の発展のしくみを発見していくところにある。子供の発展の原動力は、さまざまな形で、子供の内部に生ずる、あるいは生じさせる不安、葛藤、矛盾だといえる。このような発展の原動力としての、子供の内部的な矛盾、葛藤がどのようなものであるか、その性質に応じてどのような教師の側からの指導がなされたらよいかをあきらかにすることが学習過程の中心課題となる。

ところでこの内部矛盾はどこから起るのであろうか。彼によると「内部矛盾は、生活体としての子供と環境との相互作用のなかで生み出されるものであり、それは、環境じたいの矛盾の主体への反映とみることができる⁴⁾。」のである。従って教育の仕事は、環境のもつ矛盾を、学習主体の成長の力に転化することなのである。このように彼は反映論の立場から次のような学習過程論を展開する。その第一は、対象の矛盾の把握の段階である。

(このことについては上述したのでここでは省略する) 第二は、対象把握における部分と全体ないし構造の段階である。認識の発展においては、部分的な把握と全体的な把握とが相互作用の関係にある。第三は、対象についての概念化、一般化の段階である。人間の思考は、概念—言語を媒介として展開されるのであって、認識の発展を強く要求すればするほど、概念そのものの習得は必要とされてくる。第四は、認識と人間の価値的態度、実践とのかわりの段階である。対象についての法則的な把握をすすめていく過程で、子供たちの対象へのとりくみ方や、価値的態度が部分的に否定されたり、修正されたりしていった、法則的な把握が成立する段階ではじめて、当初の子供たちの価値的態度が構成しなおされる。

以上のように彼の学習過程論の特徴は、子供の認識の発達過程に即して科学をどう習得させていくべきかという問題意識に立って、具体的な教材に即した教授学習過程の追求を行なったところにあるといえよう。そしてそのなかでも、とりわけ、学習過程の根本的な原動力として設定した「内部矛盾」の見解に、彼の学習論の最たる特徴があると考えられる。しかしこのようにすぐれた彼の学習論にも、「認識対象の法則は同時に思考の法則である」という見解に対して同意できないのである。彼が子供の思考については自己否定的な発展を主張するのに、科学そのものについてはそれを絶対化、固定化してとらえるのは明らかに矛盾である。つまり科学の相対性の自覚が足りない(あるいはそれについてふれない)ところに彼の学習論の最大の欠陥がある。このことから彼の力説する内部矛盾もおのずと制限されたものになる。即ち、認識対象の法則を絶対化、固定化してとりあついているために、子供のもつ内部矛盾は、その枠内での矛盾にすぎないのである。子供が対象に働きかけ、対象の矛盾を受けとめ、屈折させ、自己の思考の発展の契機となるような

内部矛盾ではなく、対象の矛盾を子供がどのように理解していくかという内部矛盾にとどまるのである。ここに彼の学習論の限界がある。この限界の基因は次の見解の中にみられる。「それは、環境じたいの矛盾の主体への反映とみることができる」。このことから、認識対象を「自然も社会も、変化し発展しているもの、その変化、発展の法則をとらえ、その法則にそって働きかけることによって、変更できる」と弁証法的にとらえた彼のすぐれた見解も、中途半端に終わっていると思われるのである。弁証法の論理は、科学の相対性と子供の思考の相対性との関係において成立すると考えられるからである。

2. 広岡亮蔵の学習過程論にみられる弁証法の問題

広岡亮蔵は教育の本質をもって、客体（客観的法則）と主体（学習者の思考）との弁証法的統一にあるとし、そしてその具体的方向を、『授業改造』において「内容的には、教材を構造化、方法的には、発見学習をとるべきである⁵⁾」と提案し次のような学習論を展開している。まず教材構造については、「学習内容の精選、枝葉を取り払って根幹を明らかにすること、ミニマムを構造的に取り出すこと⁶⁾」である。そしてこの教材構造は次の二段の操作を必要とする。その第一段は「単元内容をつらぬく中心観念を明らかにすること」、その第二段は、「単元内容をなしたたせている基本諸要素をとりだすこと⁷⁾」である。つまり、単元内容を照明するサーチライトである中心観念と、その照明のもとに浮かびでてくる基本諸要素の系列とが結合するときに、単元内容は構造化されて教材構造となる。この教材構造のできあがった結果を多かれ少なかれその成立過程に組みなおし、この過程を子供自身をして自分の足で歩かせることによって教材構造を再発見させる指導が発見学習である。彼はこの発見学習の過程について次のようなモデルを考えている⁸⁾。発見学習の展開の初段階は、全体把握と学習計画である。前者の全体把握とは、学習内容の全体について、経験を出しあいつつ、直観的な把握をすることであり、後者の学習計画は、全体像をいくつかの柱に分けるかの内部分け、そしてどの柱からどの柱へと学習を進めるかの順序づけの二つの仕事を含んでいる。発見学習の本段階は、それぞれの柱の順次的なつきとめと、それを構造化された知識にまとめ上げる段階である。つまり、「直観的思考による予測の定立」→「分析的思考による検証」の内部過程をとる。こうしてそれぞれの学習問題を順次に学習し終えると、つぎは、知識構造への仕上げる段階となる。つまり、子供の手によって既習内容を整然とまとめあげさせて、体系化し構造化した簡潔な本質知識に仕上げさせる。発見学習の終段階は、適用ないし練習の段階である。さきの構造化された本質知識を、この段階において、具体的場面のなかへ適用し、さらには繰り返し使用する。以上のような学習過程を経て、生きた力、転移力をもつ力が生じてくると彼はいうのである。

このような彼の学習論に関する見解は、学習内容の構造化だけをもって、学習ができるとしているひとびとよりは、はるかにすぐれている。しかし、教材構造を固定化、絶対化している点に私は同意できないのである。これでは、彼の描く子供の主体性は、教師の意図する教材構造を迫体験させる枠内にかぎっての主体性であり、その範囲内での子供の自由な追求の過程を認めているにすぎないと思えるのである。この態度を徹底すれば、注入主義と違わない結果が生まれると極論もできよう。彼の強調する「発展する学力、転移力のある学力」は、教材構造に相対的に臨むことによって、生まれると考えるのである。弁

証法の論理は、教材構造の相対と子供の相対とのぶつかりあいにおいて形成されるといえよう。上田薫は、弁証法的唯物論についてのルカッチーの「我々の認識は現実の完全性への接近であるにすぎないから、そのために、われわれの認識はつねに相対的である。けれども、我々の意識から独立に存在する客観的实在への現実的な接近であるかぎりにおいて、それはつねに絶対的である。認識が絶対的であるとともにまた相対的であるという性格は、不可分な弁証法的統一をなしているのである⁹⁾」を引用し、『知られざる教育』の中で次のように批判している。「客観的实在を固定した動かざる「一」として認める立場においても、客観的实在はつねに近似的相対的にしかあらわにされないと主張する場合がある。弁証法的唯物論の主張がそれである。このとき近似的相対的であるのは歴史的な限定であって、本質的な限定ではない。その近似は仮構への接近ではなく、实在への接近である。このことは近似のみならず、相対についても同様である。そこにいう相対は、相対と称しながらも絶対とあい対して、いつわりの相対であるといわなければならない。相対の対するものは絶対ではなく、あくまで相対である。真の相対は、動く「一」として、相対性の自覚を通じて、そのまま絶対となる。絶対にあい対し、それに近づき、またそれを反映する相対は、本来絶対以外のなにものでもない。この意味において、このことは真の弁証法とはいえない¹⁰⁾」と。ここに動かざる「一」による立場（絶対的立場）の二律背反があり、明白な限界がある。このことは、広岡の学習論にもいえることである。つまり、教育の本質が、客体（客観的法則）と主体（学習者の思考）との弁証法的統一にあることを強調する彼の論も、教材構造を固定化、絶対化することによって、認識の弁証法をそこなっているのである。認識の弁証法の論理は、子供の思考の自己否定的発展と同時に、科学（教材構造）そのものの自己否定的発展において、両者が互いに否定しあいながら、さらに高次の肯定に両者が到達するものであると考えられるのである。

3. 上田薫の学習過程論にみられる弁証法の問題

上田薫は動的相対主義の立場から弁証法を「安直に目標を達成したとかしないとかする an sich（正）から、他と考えあわせてみれば決してかんたんにはそういえないとする für sich（反）へ、そして次に、決して達成はできないのだけれど、それを志向しなくては具体的に生きられぬという an und für sich（合）に進むということ¹¹⁾」と定義し、その観点から学習論を次のように展開している¹²⁾。(1)計画は破られるためにある。目標は子供たちのそれぞれにおいて個性的に実現されてこそ有意義であり、そのためには教師の教材選択の動的なありかたこそ、いいかえれば、指導計画の修正変更こそ、目標実現のための不可欠のプロセスである。(2)わかればわかるほどわからないことがふえる。理解は「わかったことからわかったこと」へ進むのではなく、「わからないことからわからないこと」へと進むのである。もっとも正しいわかりかたには、ああでもないこうでもないと考え考え疑問を追いかけているうちに到達していくのである。このような観点から疑問を残すような学習過程が考えられなければならない。(3)目標内容の構造化。ここにいう構造化は、教材における核と枝葉とが固定され、その結果一つの立場の絶対化がなされるという構造化ではなく、動的な構造化を意味する。この動的構造化は、子供の主体性を確保し、やがて現在を越えていくかれらの可能性をつちかうものである。この構造化あるがために教師は計画を柔軟に動かすことができる。(4)充実した空白。授業の山は教師の計画実施の曲り角、すなわち教

師が計画にそいつつ、子供の抵抗によってその変更を決断する転換点にある。好機を逸せず転換してゆく見きりこそ、目標内容の把握、子供の状況の把握が結集して成り立つものというべきである。そしてこの見きりによって学習が展開する過程に「間」があり、充実した空白があるのである。子供が個性的にある理解に到達するのはこの「間」においておこなわれる。授業研究はこのような空白を追究する姿勢をもたねばならない。以上のように彼は動的相対的立場で教材構造に臨んでいるのである。

私は、彼の相対性を自覚した動的な教材構造論には基本的に同意する。このような立場に立ってはいじめて子供の主体性が全面的に保障されるといえよう。それにもかかわらず私が彼の論に納得できないところは、子供の主体性が前面に出て、教材構造の役割が後退していることである。彼のいう動的構造はともすれば、子供の思考のヒント程度の役割しかになわされない傾向にあるといえよう。私は動的な教材構造の立場からそれにもっと積極的な役割を与えたいのである。つまり、子供の思考の变革をうながすような役割を教材構造に積極的にもちこまねばならないと考えるのである。このような教材構造論の立場に立ってはいじめて、子供の思考の自己否定的発展と教材構造そのものの自己否定的発展とによる弁証法が成立すると考えられるのである。

以上、我国における現代学習過程論の弁証法の問題について述べてきたが、その問題の基因は教材構造論にあるといえよう。そこで次章において、如何なる教材構造論が認識の弁証法を保障するかを考察していきたい。

Ⅱ 認識の弁証法をめざす学習過程試論

1. 認識の弁証法をめざす教材構造論

デューイ (J. Dewey) は『経験と教育』の中で「教育を経験の基礎に立って賢明に管理してゆくことのできるために、経験に関する理論を組み立てることが必要である¹³⁾」と、経験と教育の密接さを説き、さらに、「経験を識別する基礎をわたしたちが得るには、経験の連続の行なわれるさまざまな形式をわたしたちが気付く時である¹⁴⁾」と、また『民主主義と教育』の中で、「これまでの各章において述べてきた考え方は経験の連続的な改造という考え方に総括することができる¹⁵⁾」と、経験の連続に関する原理が、教育の根本原理をなしているというのである。そしてこの経験の連続は、「それがどのようなものであろうとも、それは環境と主体との相互作用¹⁶⁾」におけるところの連続なのである。このように彼のいう経験の概念は、経験主義者のいうように経験を感覚に起源を有する受動的なものとするのではなく、環境に対して働きかけること、その結果を受けることとの結合であり、環境と主体との相互作用の連続なのである。それ故、彼のいう経験とは、実験主義的经验を意味するのである。しかも、この実験主義的经验は、ジェームス (W. James) のように、経験的知識を素朴的に主客の間に成立する認識作用として解しているのではなく、環境の諸条件のもとに人が疑惑を解こうとする操作の結果にはかならないという観点をとっている。このような観点に立つ故に、彼の学習論は知性の実験的思考が中心となる。それではこの知性の実験的思考はどのようにしてひき起こされるのであろうか。彼によれば、それは一つの全体的状況、主体と環境との諸関係の複合体において、一つの全体経験と他の全体経験とが衝突し互に調和しない場合に思考が起こるのである。すなわち反省が

ある状況の特質となるのは、先行する無反省的経験の諸要素の間に不調和、不一致、争いが起こることによって困難の姿を呈したときである。つまり、「不確であり未決定であり混乱しているということは、探究をひきおこす不確定な状況の性格そのものである¹⁷⁾」と規定し、不確定な状況そのものが思考を促す要因であることを強調するのである。そしてここに端を発した思考は、相争う要素に統一を与えるものとして「いずれの場合も、現実の条件を実際に変化させる操作によってのみ得られる¹⁸⁾」にとられ、操作によって思考は環境との統一をなすというのである。このような不確定な状況（問題状況）から、確定した状況（問題のない状況）にいたるまでの知性的思考を、彼は探究と名づけ、その過程を、(1)暗示 (suggestions) (2)問題の確定、(3)仮説 (hypothesis) (4)推理 (reasoning) (5)検証 (test) という段階にとらえているのである¹⁹⁾。

以上のように彼の学習論の根本的性格を規定するものは、彼の思考の対象に関する見方であるということができる。彼は従来のように主客を離して考察することの誤りを指摘し、主客の相互作用、つまり、状況 (situation) において思考をとらえようとするのである。彼はこの立場から、対象は思考に先行する実在ではなく、経験の混乱に統一を与えようとして探究する思考操作によって決定されるものであると考えるのである。このように彼の教育論は学習を探究とみ、探究的学習における操作を如何に指導してゆくに眼が向けられ、その際、学習者が思考の対象に働かせているところの知識技能の組織化や拡充という点にはあまり注意が払われていないのである。このことを彼も認めて次のように述べている。

「私の重きを科学的方法に置いて来た主張は、誤った影響を与えたことを認める²⁰⁾」と。また彼の教育目的観にみられる「成長としての教育」という観点についても、教育目標の問題を「特殊な方向における発達成長の連続に役立つ場合、ただその場合においてのみ、その発達は成長としての教育の標準に適應する²¹⁾」というように、主体の「操作の側から規定される成長」という面のみから眺めているのである。このような「知識の組織化」や「教育目標の志向性」の限界は、上述したような対象に関する観点の性格から規定されるのである。この「知識の組織化」を強調したのがブルナー (T. S. Bruner) であり、「目標の志向性」を強調したのがブラメルド (T. Brameld) である。

ブルナーの学習論は *structure* の面と *competence* の面から展開されている。前者は学習の対象となる教科や教材の構造にかかわるものであり、後者は学習の主体となる子供の能力や学習意欲に関するものである。ここではデュイの「知識の組織化」の限界を克服する意味において前者を取り上げることにする。彼は「どんな科学的な内容でも、そのなんらかの真正な知性的な形において、どんな発達段階のどんな子供にでも、学ばせることができる²²⁾」という仮説の上に立って、科学的な知識の構造を重視している。彼によると、教材のよいありかたは、大量の百科知ではなく、主要な基本概念をもってすること。つまり、雑然とした表面的な網羅でなくて本質的な構造をもってすることである。ところで、彼のいう「構造」とは如何なるものであろうか。それは、「ものごとの関連の仕方²³⁾」あるいは、その関連の中核となっている「基礎的・一般的観念 (basic and general idea)²⁴⁾」のことである。従って、教材構造とは、教材の関連あるいは、教材の中核となっている一般観念（中心観念）のことである。この教材構造の効能として次のようなものが上げられる²⁵⁾。第一に、雑多な枝葉を捨てて、基本的な構造に重点をおいているために、理解が容易である。第二に、記憶が長持ちする。第三に、転移力がゆたかである。第四に、教材内

容の現代化に役立つ。第五に、進んだ知識と初歩的な知識のギャップをうめる。そしてこの構造は常に学習者のおかれた状態や機能に関係づけられねばならない、という観点から「知識の構造とは絶対的なものでなく、あくまでも相対的なものとして取り扱わなければならない²⁶⁾。」と規定している。ここに彼の **competence** の概念がある。つまり、彼は相対的な立場から教材の構造化を強調するのである。彼のこのような知識の構造のとらえ方によって、デューイの「知識の組織化」の限界は克服されるのではなからうか。つまり、デューイの相対的立場に立った教材構造の線に沿いながら、それにもっと積極的（組織化、構造化の面において）な意味あいをもたせた教材構造論を展開する必要がある。

ブラメルドは現代状況を「人類の終末が、我々の一人一人の生存中におこり得るかも知れないということは、遺憾ながら真実である²⁷⁾」と、また「しかしながら、我々は前例のない希望の時代²⁸⁾」と、とらえ、この観点からデューイの「目標の志向性」の限界について次のように述べている。「進歩主義は、それが集中するところの反省的思考の技術は非常に重要ではあるが、それが目的を犠牲にして、あまりに手段に焦点をおく点に欠陥がある。それは、開かれた心の典型的実験的精神、すべての問題のすべての面についての寛大な考慮を表現してはいるが、我々がどこへ行くかという問題には、はっきりとは答えられない²⁹⁾」と。このように彼はデューイの学習論を高く評価しながらも「目標の志向性」についてのあきたりなさを表明している。しかしこの目標の志向性について、彼は「未来中心の目標に準拠すべきことが一方で強調されるとともに、よりよい証拠に基づいて慎重に考察し、実験的な検証を行なうことによって、この目標を修正または変更する機会が常に与えられていなければならない。」と述べ、相対的立場に立った「目標の志向性」を強調している。彼のこのような目標のとらえ方によって、デューイの目標の志向性の限界は克服されるのではなからうか。つまり、デューイの相対的立場に立った教材構造の線に沿いながら、それにもっと積極的（目標の志向性の面において）な意味あいをもたせた教材構造論を展開する必要がある。

それでは、相対的立場に立った積極的な意味あいをもたせた教材構造論とは、如何なるものであろうか。このことを考えてゆくうえの最も基本的な概念として、ウェーバー (M. Weber) の「理想型 (Idealtypus)」の概念を導入したい。

ウェーバーは理想型を次のように規定している。(1)理想型の概念。理想型は「實在の一定の要素の思想的高昇 (gedankliche Steigerung) によって獲られたもの³⁰⁾」であり、この構想の経験的に与えられた生活事実に対する関係は次の点にある。すなわち、「その構造の中で抽象的に叙述されている種類の諸関連、すなわち市場 (Gütermarkt) に依存する諸事象が現実のなかで何らかの程度で働いていることが確定され又は推定された場合には一つの理想型に照らしてこの連関の特性を実際的に明瞭ならしめ且つ理解し易からしめることが可能³¹⁾」だという点である。このような理想型は「その概念的な純粋性において現実のうちには何処にも経験的には見出され得ない。それは一個のユートピア³²⁾」である。このように理想型は、實在からの思想的高昇によって獲られ、そして獲られた理想型によって實在は逆に明瞭にされるという性格を有している。しかも、この理想型は現実のうちには何処にも見出され得ないユートピアなのである。(2)理想型の論理的性格。理想型の論理的性格について、彼は「存在すべきもの、模範的なものの思想は、我々の語るこの純論理的意味での理想的思想形象から先づ慎重に取りのけておかねばならぬ。我々の想像力にと

って十分に理由づけられているものとして、すなわち客観的に可能だと見え、我々の法則定立的知識に的確だと見えるような連関を構成することが問題なのである³³⁾」と、理想型の純論理的完全性を強調し、そしてまた、「何かある歴史的ユートピアを構成することをもって、歴史の研究の不偏性にとって危険な説明手段だと見るむきもあるであろうが、ここでもまたただ一つの標準、すなわち、具体的な文化現象をその連関、その因果的制約性並びにその意義において認識することに対する効果という標準があるのみである。それゆえに理想型の構成は目標としてでなくて、手段として考えられているのである³⁴⁾」と述べ、この理想型を研究のための単なる手段として考えているのである。つまり、理想型の論理的性格は、彼においては、純論理的完全性を意味し、そしてそれが研究のための手段となるという性格を有しているのである。(3)理想型の機能。理想型は一つの実像であって、歴史的実在であるのでもなければ、まして本来の実在であるわけでもなく、実在が類例としてその中に配列されるべき一つの図式の役目を果たすためにあるのでもない。かえって、それは「一つの純粋に理想的な極限概念の意味をもつものであり、我々はそれによって実在を測定し、比較し、もってその経験的内容の中の一定の意義ある部分を明瞭ならしめる³⁵⁾」にあるとし、さらに、「理想型概念方式のみが、経験的なものを理想型に対比する方法を媒介として、個々の場合の考察に入ってくる諸観点の特性を真に明瞭ならしめる³⁶⁾」のであると、理想型による明瞭性を説いている。このように理想型を実在を比較し測定する概念的手段として用いているのである。

以上のように彼は認識の客観性を得るための手段として理想型を考えている。このような理想型の趣旨からいって、これは相対的に取り扱うことによってはじめて意義を有するといえよう。この理想型概念と同様に教材構造をとらえることによって、つまり、教材構造を学習者の思考の展開過程の分析の道具として、また学習者の思考の展開目標とみなすことによって、真の認識の弁証法が成立すると考えるのである。

2. 認識の弁証法的展開過程論

教材構造をウェーバーのいう理想型と考えることによって、真の認識の弁証法が成立すると考えるが、それでは認識の弁証法はいかなる展開過程をたどるであろうか。私はこのことについて、その原型をヘーゲル (F. Hegel) の『精神現象学』序論に見出したい。彼はここにおいて、「真なるものはたんなる実体ではなく、同様にまた主体である³⁷⁾」と述べ、絶対者を悪無限 (有限者に対立する意味での無限者) としてでなく真無限 (有限者を自己のうちに含んだ無限者) としてとらえるべきであるとしている。このように彼は、絶対者を真無限としているために、絶対者についての認識は有限者についての認識を不可欠とし、そしてこの有限者についての認識は悟性的認識から出発しなければならないというのである。しかし有限の現象は決して絶対者ではないのであるから、悟性的認識にとどまることのできないことは言うまでもない。悟性的認識の限界を自覚して、しだいに高次の立場に向かって弁証法的に認識を展開させてゆかねばならないのである。そして、彼はこの弁証法的展開過程を「それは、まず実在としては、それ自身においてあるもの、すなわち即自的存在である。他方、特定の関係のなかに身をおき、規定されているもの、他としてあり自分に対してあるもの、すなわち対自的存在である。そしてさらに、このように規定され自分のそとにありながら、自分自身のうちにとどまっているものである。すなわち即自的、

対自的にある³⁸⁾」と、また、「即自的存在、対自的存在、自己同一性などという単純な規定に、注意を集中することである³⁹⁾」と、三段階にとらえているのである。つまり、第一の段階は、それ自身のうちに矛盾が含まれているにもかかわらずその矛盾に気づいていない段階、即自態 (an sich) と言われるものであり、第二の段階は、この矛盾を自覚する段階、対自態 (für sich) と言われるものであり、第三の段階は、第一段階の即自と第二段階の対自との総合である即自且対自態 (an und für sich) と呼ばれるものである。このように認識は弁証法的進展を行なうことによって、不明確な認識からしだいに真なる認識へと進んでゆくというのである。彼はこのように認識の展開過程の基底に否定 (Negativität) の概念を導入し、弁証法の論理を説いている。このことは次の言葉に端的に表われている。「実体へと転ずる存在は、否定的なものにただむかって直視し、そのもとに身をおくという、ただそのことに存する⁴⁰⁾。」彼のいう認識の弁証法は絶対者の認識をめざすものであったけれども、しかし絶対者の認識という考え方を取り除いても、認識の弁証法という考え方自体は成立する。我々が如何なる対象について認識する場合にもこのような認識の弁証法的展開があるといえよう。

彼のいう「即自 (an sich)」とは直接性を示し、「対自 (für sich)」とは媒介性を示し、「即自且対自 (an und für sich)」とは直接性と媒介性の統一を示す。これを教育的認識論の観点から述べると、対象を直接的にとらえるのは直観的方法であり、その直観的方法によってとらえたものを媒介的にとらえなおすのが分析的方法であり、さらにこの直観的方法と分析的方法とを統一するのが弁証法的方法である⁴¹⁾。この弁証法的方法において重要なことは、直観的方法でとらえたものが分析的にとらえなおしたものを基本的に規定するということである。ここに直観の重要な意義がある。

ところでヘーゲルのいう「an sich」から「für sich」、「an und für sich」には如何にして移るのであろうか。彼のいう否定 (Negativität) の概念はどこから引きおこされるのであろうか。彼にはこのことについての説明がみられない。この点が彼の弁証法の解釈上の一つの根本的な疑点ではなかろうか。この課題を論理学研究の中心問題としてとり上げたのがデューイである。彼は『論理学—探究の理論—』において「für sich」から「an und für sich」までの過程を、「有機体と環境の相互作用における不均衡状態⁴²⁾」から「有機体と環境の相互作用における均衡状態」までの過程としてとらえ、ヘーゲルの弁証法を一步進めている。デューイの弁証法の過程とヘーゲルのそれとを対比すると次のようになる。つまり、ヘーゲルの「an sich」の段階はデューイの「問題のない段階」であり、「für sich」の段階は「問題をもつ段階」であり、「an und für sich」の段階は「問題の解けた段階」ということになる⁴³⁾。デューイはこの三段階に移る起因を「環境と主体の相互作用における不均衡」に求め、ヘーゲルが説明しえなかったところを見事に解明している。ここにデューイの弁証法に関する卓越した論理があり、実践性がある。とくに学習過程に、この認識の弁証法を取り入れようとするればデューイの見解のすばらしさが実証されよう。しかしこのようにすぐれたデューイの見解も、その反面において、ヘーゲルのいう「an sich」(教育的認識論の観点から直観と考えられる) の意味が弱められるという欠陥を現出することも否めない。この弱点を補うために、私は直観を重んずるブルーナーの学習過程論の展開を試みたい。

ブルーナーは前述した教材構造を子供の認識の論理をふまえながら、子供に如何にして

定着させるかという観点から発見学習 (heuristic learning) を展開する。この発見学習は次のような過程をとる。まず第一段階は、仮説ないし予想を立てる段階である。この段階においては、主として直観的思考の働きにまたねばならない。直観的思考 (intuitive thinking) は「入念で輪廓のはっきりした段階を追って進まないのが特徴⁴⁴⁾」であり、直接的な把握または認知である。それは分析と証明という間接的方法をとらないで、事態がもつ意味や構造をあらづかみにする行為である。手早く仮説をたて、諸観念間の結合を思いつき、それに関する知識を仮定的に秩序づける行為である。直観的思考はこうした仮説的な認知であるだけに、認知の真偽のほどは未確定である。仮説は検証されねばならない。ここに分析の段階がある。第二段は分析の段階である。仮説がもつ中味を分析し、結び直しをほどこし、分析と総合によって固め直しをするのは、分析的思考 (analytic thinking) である。「いちど直観的方法で得られたならば、その解決は、分析的方法で照合されなければならない⁴⁵⁾」のである。つまり、「まず予見し、ついで確証する」かたちで、直観的思考と分析的思考とはおぎない合う。第三段階は、直観的思考と分析的思考とによって把握された内容を知識構造へと仕上げる段階である。つまり、子供の手によって既習内容を整然とまとめあげさせて、体系化し構造化した知識に仕上げさせる段階である。この段階において教材構造は把握されるのである。以上のような第一段階から第三段階までの過程が発見学習の過程である。この発見学習の概念と教材構造 (前述した) の概念とによって彼の学習論は成立している。これらを総括して学習過程の段階を示すと、第一段階、教材 (構造を暗示しているような) の提示。第二段階、直観的思考。第三段階、分析的思考。第四段階、教材構造の把握となる。

このような彼の学習過程論をデューイの学習過程論の基盤の上に構築することによって、真の認識の弁証法的展開過程論が形成されるのではなかろうか。

ところで認識の弁証法をめざす学習過程における人間関係 (個人と集団の関係) は如何なるものであろうか。この問題については、私はブラメルドの学習過程論の展開を試みることによって答えたい。彼はデューイの「目標の志向性」の弱さを指摘し、社会的一致 (social consensus) の学習過程を展開している。彼は、「ある文化の内部の集団生活における最も生き生きとした経験の真理は、それらが生みだす必要な満足によってだけ決定されるものではなく、それらの意味が関係する集団のできるだけ多数の人々によって、同意され、そしてそれに従って行動される程度によって決定される。その同意を検証する行動をとる同意がなければ、経験は真ではない⁴⁶⁾。」と述べ、進歩主義の実験的知性による真理追求の方法を不可欠のものとして認めながらも、社会的一致の過程がもっと重視されなければならないことを強調する。この社会的一致は単に多数者が主観的な願望において一致するというような浅薄な、形式的な多数決のことではない。その証拠に次のような学習過程をとっている。その第一段は、欲求についての証拠を集団の中に提出する段階 (learning through the evidence)。第二段は徹底したコミュニケーションの段階 (learning through communication)。第三段は一致の達成の段階 (learning through agreement)。第四段は実践の段階 (learning through action)。の四段階に定式化している⁴⁷⁾。彼は欲求についての証拠を集団のなかに提出する段階こそ現代文化のゆがみにたいして、対応できることであり、このような段階を経過してこそ、「社会的自己実現」が可能となり、社会の問題の根本的解決の方向と手段とを探索する学習が展開されるというのである。このよう

に彼の社会的一致の学習は、個人的過程ではなく、社会的集団過程である。つまり、デューイの反省的思考を集団過程として構成し、デューイの「目標の志向性」の限界を社会的一致の学習過程において克服しようとするところに彼の学習過程論の特徴がある。

このような彼の学習過程論をデューイの学習過程論の基盤の上に構築することによって、真の認識の弁証法が成立するのではなかろうか。個人の認識は集団の中にあって弁証法的に高まると考えられるのである。というのは、いろいろ異なった考えをぶつけあうことによって、認識の弁証法は成立すると考えられるからである。つまり、認識は社会交通、社会協働を通じて弁証法的に発展すると思われ、その点、デューイよりブラメルドの方が徹底していると考えられるのである。

以上述べたことを結論的に言うと、認識の弁証法をめざす学習過程論とは、デューイの学習過程論の基盤の上に、ブルーナーの学習過程論とブラメルドの学習過程論を構築したものである。つまり、これらの学習過程論を固定的、対立的にとらえるのではなくて、学習者の問題を出発点とし、それを集団の課題にまで高め、そして、この問題を教師と生徒の共同の問題解決学習方式によって解決してゆく過程をとる。さらに、この過程において必要とされる文化の体系を発見的に学ばせる。このような経験の再構成を組織的にはかってゆく学習過程論が認識の弁証法をめざす学習過程論といえよう。

以上考察したのは、学習過程論の認識に関する問題の教育哲学的論考である。しかしながら教育は生きた働く事実であるから、教育の論理に関する論考は、このように教育哲学的側面のみの考察に終始してはならない。それは教育技術の側面との相即的な連関でとらえるところに意義があると考ええる。このような観点からの思索を進めてゆくことを今後の課題としたい。

文 献

- 1) 川合章著「教授学習過程」 明治図書 1962年 2頁
- 2) 上掲書 3頁
- 3) 上掲書 70頁
- 4) 上掲書 93頁
- 5) 広岡亮蔵著「授業改造」 明治図書 昭和39年 2頁
- 6) 上掲書 57頁
- 7) 上掲書 44頁
- 8) 上掲書 60～61頁
- 9) ルカッチー、城塚、生松訳：「実存主義かマルクス主義か」 岩波現代叢書 235頁
- 10) 上田薫著：「知られざる教育」 黎明書房 昭和39年 308～309頁
- 11) 上田薫著：「人間形成の論理」 黎明書房 昭和39年 86頁
- 12) 馬場四郎編：「授業の探究」 東洋館 昭和40年 上田薫、＊授業研究についての覚え書き、
- 13) Dewey, J. : Experience and Education, 1938, p. 23
- 14) Ibid. p. 28
- 15) Dewey, J. : Democracy and Education, 1933, p. 39
- 16) Dewey, J. : Experience and Education, 1938, pp. 38～39
- 17) Dewey, J. : Logic —The Theory of Inquiry—, 1938, p. 105

- 18) Ibid. 1938, p. 106
- 19) Dewey, J. : How we Think, 1933, p. 107
- 20) Dewey, J. : Experience and Education, 1938, p. 111
- 21) Ibid. pp. 28~29
- 22) Bruner, J. S. : The Process of Education, 1960, p. 33
- 23) Ibid. p. 7
- 24) Ibid. p. 17
- 25) Ibid. pp. 23~26
- 26) Bruner, J. S. : Toward a Theory of Education, 1966, p. 41
- 27) Brameld, T. : Education as Power, 1965, p. 11
- 28) Ibid. p. 11
- 29) Brameld, T. : Education for the Emerging Age, 1961, p. 25
- 30) Weber, M. : Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, 1922, S. 190
- 31) Ibid. S. 190
- 32) Ibid. S. 191
- 33) Ibid. S. 192
- 34) Ibid. S. 193
- 35) Ibid. S. 194
- 36) Ibid. S. 212
- 37) Hegel, F. : Phänomenologie des Geistes, Vorrede, 1928, S. 19
- 38) Ibid. S. 24
- 39) Ibid. S. 48
- 40) Ibid. S. 28
- 41) 上山春平著：「弁証法の系譜」 未来社 1963 11~12頁
- 42) Dewey, J. : Logic —The Theory of Inquiry—, 1938, p. 106
- 43) 上山春平著：「弁証法の系譜」 1963, 203頁
- 44) Bruner, J. S. : The Process of Education, 1960, p. 58
- 45) Ibid. p. 58
- 46) Brameld, T. : Toward a Reconstructed Philosophy of Education, 1965, pp. 92~93
- 47) Ibid. p. 209

なおこの論稿を構成するにあたって上記の引用文献のほかに次の文献を特に参考にしたことを付記する。

- (1) 神蔵重紀著：「教育基礎論」学芸図書 昭和31年
- (2) 金子 敏著：「教育課程の新研究」学芸図書 昭和44年
- (3) 教師養成会編：「教育原理」学芸図書 昭和44年
- (4) 小川 正著：「学習過程の構造」明治図書 1965年
- (5) 岩崎武雄編：「世界の名著第13回」中央公論 昭和42年
- (6) 長田新企画：「教育哲学第1巻」御茶の水書房 1962年
- (7) ブラメルド著、松浦、山中訳：「来たるべき時代の教育」慶応通信 1967年
- (8) ウェーバー著、立野、富永訳：「社会科学方法論」岩波書店 昭和39年
- (9) 宮坂哲文著：「生活指導の基礎理論」誠信書房 昭和41年
- (10) 井上 弘著：「改造主義の教育学」明治図書 1967年

Summary

In this thesis, I attempt to make clear the structure of the learning process aiming at the dialectics of recognition with the following logical constitution.

- (I) The problems of the dialectics of the present learning process theory in Japan.
 - (1) Some problems of the dialectics in Kawai Akira's learning process theory.
 - (2) Some problems of the dialectics in Hirooka Ryoza's learning process theory.
 - (3) Some problems of the dialectics in Ueda Kaoru's learning process theory.
- (II) A preliminary essay on the learning process aiming at the dialectics of recognition.
 - (1) A structural theory of subject matter aiming at the dialectics of recognition.
 - (2) A dialectic developmental process theory of recognition.

The conclusion : it is best to induct the conception of M. Weber's "Ideal typus" as for the structural theory of subject matter and also, as for the dialectic developmental process theory of recognition, to compose J. S. Bruner's learning process theory and T. Brameld's learning process theory by putting base on J. Dewey's theory of learning process.

(昭和45年 2月28日受付)

EQUALITY, LIBERTY, AND DEMOCRACY

by

Sonboku OKUDA

Imabari Meitoku Junior College

EQUALITY

There is a sentence "We stood at God's feet, equal — as we are" found in Charlotte Bronte's *Jane Eyre* in Chapter XXII, when Jane Eyre protested against her master and suitor, Mr. Rochester. Brought up in Christian doctrine, all Christians have entertained equality in the depth of their heart. Along with Christianity, they have been imbued with the creed of equality and liberty. This idea of equality has made them wish to keep up with apostles.

In Oriental countries Buddhistic doctrine gripped the heart of the people, esp., of the lower classes, as they believed that their lords were superior, to whom they should pay much respect and homage. They had become enlightened by the precept that, regardless of their status and wealth, all men are born equal with potential Buddhahood. This teaching of all men's equality at the foot of Buddha encouraged them to stand up upright before any ruler and to bear all the hardships of this world.

Just like Buddhists, Christians believed in the equal value of the individual in the sight of God and in salvation by which sinful men could be redeemed. How precious its precepts were to those lower classes is shown in the rapid diffusion of the Christian belief in European countries. As H. Laski points out, till now Christianity has made a great contribution to the welfare of human beings, esp., of a great number of the poor. In ancient society it gave the lower classes a glorious dream and courage sufficient to endure their miserable conditions of life. It also urged all of them to be conscious of the same worth of character of the poor as that of the rich. At least till the Christian belief came to take a compromising attitude toward the worldly authority, it had kept affirming equality of character. In short, although it had some unscientific elements in the doctrine, it remained a glorious light to the lower people, acknowledging their substantial rights, and impeaching the social order of the upper classes that disapproved the justice of rights of the lower ones.

Later it came to stand by the feudal lords and nobles, admitting unchangeable class privileges and exploitation, because the church code had come to be accepted as the only principle for all. Although its aim is salvation, the church as the agent of the Christian Commonwealth on earth, ruled over the whole worldly people about such things as the payment of labour, just price on any merchandise, and the control of profits. Therefore the power of the Christian religion as a spiritual force was so great that there appeared at

first no sign of democratic movement. By preaching on the expansion and success of their business by thrift, diligence, and seriousness of mind, it merely followed the current of the time. Some Christians persuaded themselves that to be poor was to be immoral, and felt sure that material success was the evidence of God's approval, forgetting the precept against the arrogance of the upstarts:

"Blessed are the poor in spirit, for theirs is the Kingdom of heaven." But for Luther (1483-1546) and Calvin (1509-64) it would have gone its way to secularization. Although Luther was excommunicated as a heretic by the Pope for the charge of his denial of the Pope's indulgence, he asserted that the Bible is the only highest authority. Calvin also stood for the control of the state by the church—theocracy. Under their influence there came out many bibliolatrous sects in Europe.

In England Queen Elizabeth I (1533-1603) established the church of Protestantism — the Church of England, and subordinated it to royal power, defying the authority of the Pope. In her absolute monarchy, although she was clever and generous, there was for the individual freedom neither of occupation, nor of opinion, nor of religion, nor of any recognized method by which he might initiate or modify the law and customs which controlled his thought and conduct. On the other hand, James II tried to restore Roman Catholic, wishing to be an absolute monarch, and persecuting many of the Protestants. In April, 1697, he issued the Declaration of Indulgence and abolished the Test Act of 1673, and also all other laws which were injurious to Catholics and Protestant Dissenters. Although they won equal treatment and religious freedom of believing their own God, it was confined to Catholics. However, they were not permitted to enjoy political equality. In England, until the people set William and Mary on the throne after the Revolution, there had taken place a series of religious persecution. T. Macaulay explains minutely about the history of persecution in his book "Critical and Historical Essays". He says:

"To punish a man because we infer from the nature of some doctrine which he holds, or from the conduct of other persons who hold the same doctrines with him, that he will commit a crime, is persecution, and is, in every case, foolish and wicked." "To argue that, because a man is a Catholic, he must think it right to murder a heretical sovereign, and that because he thinks it right, he will attempt to do it, and then, to found on this conclusion a law for punishing him as if he had done it, is plain persecution."

The dispute about their creed brought about many shameful acts of murder, punishment, and banishment. During these ages of bloody persecution, dissenters and pagans, including atheists, cried for equal treatment before the law and for liberty of conscience. Puritans, for example, defying the intolerance by Protestant Kings, demanded religious freedom from them. Refused their demand of tolerance, they went over to the barbarous land of America, braving the perils and hardships on the sea.

Inequality means unequal treatment before the law. Reason always calls for equality as a member of the community and, we believe, reason and equality call for freedom.

Generally speaking, equality and freedom are reciprocal to each other. Later we will explain the relation between equality and freedom.

The Magna Charta (1215) and later the Petition of Right (1628) and the Bill of Rights (1689) permitted the English people to act freely and to enjoy equal treatment before the law. Human rights are a requisite for the citizen in a democratic state. "Man is born free," says J. J. Rousseau in his "Social Contract", but he could not assert that "Man is born equal". Each man has his own traits or likings or characteristics. Though he is not always equal in quality, or wisdom, or environment, he should be treated equally before the law. He believes it is indispensable to his happiness. This idea of equality was much concerned with justice of law, but was not so concerned as to assert that man is born equal. This notion of equality was merely a norm for the law. Later in the eighteenth and nineteenth centuries this norm developed into a demand that every citizen should have equal rights, equal participation in political affairs, social equality, and equality of opportunity. Because people share alike in universal reason and are children of God, all men, they believed firmly, are equal in dignity or importance, and differences in rank, wealth, or power are too insignificant. Thus their belief in man's essential equality came to have political implications. They grew conscious that men, though naturally equal, are confronted with inequalities in political and social institutions. Specific inequalities were the authority of kings, the privileges of nobles, and the dominance of the male. To deprive them of their prerogatives, the plebians made struggles against them. Such movements were the Bill of Rights, or the Petition of Right, or sometimes revolutions which were waged against the government. This concept of equality came to hold political importance and continued a guide for the reconstruction of political and social institutions.

There came out two types of democracy: one, Capitalistic democracy; the other, Communism. In American democracy, this ideal of equality bloomed in equality of opportunity. It endowed any citizen with an equal chance for educational and health institutions. It also opened the way to the competition of enterprises. At this stage the ideal of equality was so associated with that of freedom. Without equality, freedom could not be sufficiently enjoyed. Without freedom, equality could not be achieved. These ideals of liberty and equality in the concepts of equal rights made the oppressed awaken to the realities of life. Communists argued that this capitalistic ideal of political and legal equality was a mere pretence when some people were hungry, others had plenty; when many people labored long and hard, a few lived elegantly in leisure. Indeed the "idealistic state" could not operate well before the realities of life. Equality of opportunity could not ensure the equal sharing of burdens and benefits. Luck, differences in ability, and economic depressions caused some people to remain hungry and homeless, while others lived comfortably and prosperously.

Equality could not permit the exercise of one's special rights unless one could let others have their own. Especially one must acknowledge and respect others' earnest claim for fundamental rights: food, clothing, and shelter. Just like a precept of Christian

doctrine the rich should share their belongings among the poor. One should not keep others from realizing their character, because it means to give happiness to them. Citizens should have an equal participation in social and political activities, for they, though different in capacity and environment, are equal in human worth.

Equality of opportunity must give anyone a chance to improve his ability so that he may share the prosperity of society with others. However different he is in ability, in so far as his aim is not contrary to the objects of society, he should be permitted to participate in equitable terms in economic and political competition. "Fuhei", a Japanese word, meaning "not being equal", is almost always put into "dissatisfaction". Being unequal brings about dissatisfaction in mind. One should use every means to get rid of others' grievances and make them live a happy life. That is the only object of good statesmanship. As Aristotle says in "Politics", lack of equality is one of the deep-seated causes of revolution. It means to give some groups special rights which were often exercised excessively, and yet to refuse to give natural rights to others. It is still worse since prerogatives are often endowed, not through the consent of the people, but artificially through the social circumstances. While the possessors are often apt to become privileged classes, the powerless find it difficult to get happy.

Equality is not exactly similar to liberty, but complementary to it. The more equally the rights of the citizen are exercised, the wider the realm of liberty would be. It is so connected with each other. Owing to the difference in men's ability, social environment, or education, equality does not always mean equal distribution of wealth. Karl Marx writes in his "Das Kapital" Vol. I:

"In an ideal community where no rich nor poor are found, in which the world's good, being produced in accordance with social demand unhampered by the caprice of individuals, will be distributed not indeed equally — a notion so lamely borrowed by the workers from the liberal ideologists with utilitarian concept of justice as arithmetical equality — but rationally, that is unequally; for as a man's capacities are unequal, his reward, if it is to be right, must, in the formula of the Communist Manifesto, accrue to every one according to his need and capacity."

Marxists, including H. Laski, assert that there could be no real freedom in the bourgeois community that has no economic equality. If the people can't enjoy economic equality, democracy would either come to nothing, or would exert an evil influence on society.

Equality is, we believe, the essence of democracy in which everyone can realize his demand for happiness. Much influenced by this Utopian dream of Communism, the ideal of legal equality or equality of opportunity has undergone a great change. Connected with this transformation, there has taken place a subordination of the ideal of liberty, and some change in conceptions of the proper structure and function of government. We don't know what is the best way to construct a community in which all burdens are equally shared and all needs equally met. How can we find a new synthesis of the two aspects of the ideal of equality and workable adjustment of it to such other ideals as those of liberty,

justice, and social efficiency? Can it be found only in Communistic states, true equality which can supply every kind of citizen with his suitable needs? Who can deny the fear that, even in a so-called Communistic World that has economic equality, unequal distribution of the profit or salary may bring about an unfair accumulation of wealth among the "disciplined clique" of Communists? In the Communist state "able gifted" dictators will win the control of the mind and wealth of the people. There will, we guess, eventually ensue the fall of Marx's ideal Utopia of Communism.

What is the best way to maintain real equality? It is the policy to give every one education by which he can cultivate his ability. While removing the evil influence of Capitalism as far as we can, we must build a happy democratic society where everyone can enjoy his own equality and liberty with his hopeful mind.

LIBERTY

Patrick Henry (1736-99) made a revolutionary speech in the Virginia Assembly on April 19, 1775, a little before the War of Independence, in which he cried out: "I know not what course others may take, but as for me give me liberty or give me death." Thomas Jefferson also wished to be numbered with the dead rather than called a "villainous rebel". Liberty was so dear to them that they would stake their lives and properties on it. Perhaps liberty was everything to them; that is to say, theirs was freedom from captivity, slavery, or despotic control. Does it mean only this?

Today many philosophers or social reformers are trying to interpret the real meaning of freedom. Some democratic scholars argue that democratism has more liberties than Communism has, while Communists assert that Communism has real freedom, because American democracy has no economic equality. One boasts of many kinds of liberty: freedom of thought, of conscience, of the press, and of the association, while the other denies them, saying that what Capitalistic democrats are boasting of is a mere pretence, and that it is only artificial freedom for bourgeoisie, not for proletariat.

At first the lower classes, most of them Christians, were persuaded that they are equal in the sight of God, so they believed in equality of personality. This idea of equality gave rise to a cry for political liberty in the community. They believed that they had the same rights as lords or nobles had, and they felt sure that they could enjoy the same freedom as aristocrats did. Then in England the Magna Charta in 1215, and later the Bill of Rights in 1689 came to be acknowledged by the king. Throughout the Middle Ages, the people, most of them the lower classes, had continued to hold the holy fire of equality and liberty in their secret corner of the mind. However, the Acts of Supremacy and Conformity by Queen Elizabeth I in 1519 obliged the Pilgrim Fathers and Dissenters to set sail to America, seeking for religious liberty, liberty of worshipping their own god. This freedom of conscience was one of the fundamental rights which, the English believed, were inherent

and essential.

Voltaire tells us of the doctrine of natural law: "All people everywhere, whatever their status, are entitled to the rights of life, property, and happiness." "Man is born free," J. J. Rousseau says in his "The Social Contract", "and he is everywhere in chains. To renounce liberty is to renounce mankind." That is to say, to be free is one of the requisites of life. But freedom does not always mean to do anything as one likes. "Liberty means," says Prof. H. Laski in his "Liberty in the Modern State" "absence of restraints upon the existence of those social conditions which, in modern civilization, are the necessary guarantees of individual happiness. The citizen seeks for happiness and the state should help to make him happier." Here we must come to the Declaration of Independence:

"We hold those truths to be self-evident, that all men are created equal; that they are endowed by their Creator with certain inalienable rights; that among them are life, property, and the pursuit of happiness."

Indeed democracy could not exist without equality and liberty; liberty of, thought, religion, the press, and speech. Since old times many scholars and thinkers have tried to interpret the meaning and quality of freedom. Christians had believed that they could find freedom only in the truths of the Holy Book. When a quarrel broke out about the question of which was real Christianity, Catholic or Protestant, they began to suspect the reliability of the Bible, and grew rational enough to realize the value of their own character. This recognition of the value of character grew up to be a movement of civilization and bloomed in classic literature. Humanism, one of the movements of the Renaissance, gave birth to new ideas and new points of view. It was Humanism in the 14th, 15th, and 16th centuries that emancipated reason from the fetters of the Bible, and led people to seek after scientific knowledge which brings progress to mankind. The Protestant movement, whose initiator was Martin Luther (1483-1546), was a step stone to rationalism, and the Renaissance gave birth to individualism — a new intellectual attitude to the world. Thus humanism, rationalism, individualism, and scientific knowledge of the world gave impetus to different interpretations of liberty. There have appeared a lot of exponents or scholars of freedom one after another: Kant (1724-1804) of Critique of Pure Reason; Hobbes (1588-1679) of natural rights; Rousseau (1712-78) of Du Contract social; Locke (1632-1704) of Human Understanding; Mill (1806-73) of "On Liberty"; Marx (1818-83) of Communism; Jaspers (1883-) of Existentialism; and so on. Indeed there is nothing that is explained so diversely as freedom.

B. Russel points out in his book "What is Freedom?" that there are many kinds of freedom and some of them are not to be permitted, because they diminish the freedom of others, for example, freedom to kill others or to enslave them. He divided it into national freedom, freedom of the group, individual freedom — political, economic, mental, and physical freedom. However, there must necessarily be some limitations to it. Could we, as Russel says, tolerate attempts to replace democracy by despotism? Could we extend toleration to those who advocate intolerance? And above all, should a nation permit the

formation of powerful groups which aim at subjecting it to foreign domination?

In the negative conception freedom means the absence of external constraints over the acts of the individual. In the positive meaning it has many points of issue arising and being argued between American democrats and Communists. A vehement dispute has arisen among them, and has often led them to struggles against each other. Laski defined it in a positive sense: If the state puts some restraints on the individual, and clears his will of the impurities, real will shall be realized, and he will be able to become a master of freedom.

There may be other classifications of freedom, but we think it best to divide it into two categories; one — freedom from state authority: freedom based on organization; the other — freedom to state authority: freedom not based on organization. As Engels writes, freedom is inevitably one of historical products. In its essence freedom is expected to have an opponent, or a subconscious possibility of opponent, which can direct it, or can give restraints on it. Freedom is rather passive. Nevertheless, it can't be found in simply obeying the orders or restrictions put by the state. And even if we, intending to be free from the binding force, were to live a solitary life far away from society, we should lead a miserable life in anarchy, because we have destroyed the foundation of existence of freedom. Therefore we must try to harmonize the restraints by organization with requests for freedom. By doing this, the democratization of organization will be able to take place smoothly.

In the modern community where the individual can live a democratic life and contribute to the progress of civilization, there must exist much freedom in the relationship between society and the individual. The community, which consists of individuals, has an obligation to keep order by imposing constraints on them, while the individual rejects them. Therefore in their relationship, the good results of democracy depend entirely upon each other's endeavour to restrict the constraints in a democratic way. So freedom does not always mean a negative side. In the modern community, esp. of socialism, it often takes a positive meaning in which some restraints may well be imposed on the individual. Because he is a component of society as well as a social being, it aims at the accomplishment of human character. So the objects of the individual are so often opposed to those of society, that it is very difficult for both of them to be in perfect harmony with each other. In order to be free from the control of society, he should elect his representatives in a democratic way and have him restrict the control by society as possible as he can. When his doings are contrary to the citizen's wish, he should have a right to replace him.

In a democratic society of today some of the citizens are waging bloody battles with their opponents, or state authority, wishing to be a governing class, and so there often arises a serious problem that the appeals of the defeated will not be listened to, and their requests never realized. If that is the case, democracy would lose the glory of its function. To remove the troubles from them, one should keep strict observance of the principles of democratic government and defend the rule of decision by majority. Otherwise we may

fall into a revolution by Communists, and be eventually defeated in the struggle.

As H. Laski says, in a democratic state, the citizen should get a chance to realize the best ego in spiritual, economic, or political sphere, and also to put his initiative into practice. Then he can become a true holder of freedom. When the citizen comes to acquire all citizens' and universal freedom, it may seem that he holds expanded freedom and has restricted the power of the state. It is not always the case; on the contrary, it may be, as it were, an expansion of authority, because it is only to regulate this power by the law. Liberty is primarily in a hostile position to authority, which imposes restrictions on it, but, at the same time, the law that safeguards freedom restricts authority. That is to say, freedom from authority is also not other than freedom to authority.

At this stage one can reach the state of freeness, just as Confucius says: "At seventy I will not overrun the precepts of a wise man whatever I do." In a really democratic state freedom of thought leads one to the inquiry into, and realization of, truths, and freedom of occupation opens the door to his ability, and political freedom protects him from being constrained against his will. In such a free community as this, any citizen can enjoy a happy life — that was one of the happy dreams of democrats; in fact there came out a reverse side of it.

What is the opinion of Communists? They assert that there can be no freedom in capitalistic society; what it proclaims to have is anything but freedom; it is simply a camouflaged one; real freedom can be acquired only in a socialistic community in which the people can enjoy economic equality; what capitalists are proud of enjoying is merely freedom for bourgeoisie, not for proletariat; although capitalistic democrats are boasting of freedom of speech, it is under the control of a few bourgeoisie, not of proletariat. Communists also preach to us: present-day freedom of Capitalists is not one based on equality, not one that has in essence all people's democratic universality, but one enjoyed only by a few special classes — that is no real freedom.

Marxists believe in the Communistic doctrine: "Every individual can acquire liberty only in elevating his private character and in struggling for its improvement. It is in confrontation and strife that we can bring about true freedom and its advancement." If that is the case, let us see the actual life in Communistic states, for example, in the U.S.S.R.. Karl Marx, founder of Communism, dreamed of a Utopia where, after the disappearance of bourgeois society the conflict will disappear for ever, and the pre-historic period will be completed, and the history of free human individuals will at last begin. However, the actual state of Russia is quite different from what Marx hoped for. Common decisions are made, not by the majority, but by a "small and resolute body" of dictators. In the name of the people, the clique always make use of brutal steps to realize its ends which, not the people, but the clan, judge to be good. Whatever theory they may proclaim, they, in effect, subordinate reason to will, identify rights with naked force as an instrument of will, and accord value to the disinterested research for truth only "in so far as the dictators judge to be temporarily useful for the attainment of immediate political ends."

In his book "What is Freedom?" B. Russel made vehement attacks on the Soviet way of government: "Never before in human history has it been possible to impose such complete mental slavery as to be found in modern totalitarian states." A Russian worker whom the authorities dislike is to be deprived of his ration book. If he would not change his principle, he will be sent for life to a concentration camp in the far North. After his death the theory of Socrates (469 B. C.-399?) was handed down to us by Plato (427?-347 B. C.). However, those Russians who are put to death on the charge of heresy would not be permitted to leave his opinions for explanation. Not every young Russian can enter the Moscow University unless they pass the entrance test. No Russian is permitted to study, set forth, or advocate any other doctrines that he believes most true. He can only study or publish those Communistic doctrines allowed by the Russian authorities.

It is just likely to say that trains are free only while running on the rail. So the rail is the most important, and any other means of transportation can not be allowed. For traffic service there are many other means of communications: automobiles, ships on the sea, or airplanes in the air. In a really democratic community one should be permitted to think of a new theory, or to advocate his original opinion freely. At the same time one should have a magnanimous mind to listen to others' theory. If one should not be given such chances and freedoms in society, one could hardly say that it is democratic society. Communists' way of doing things is just like the method of trying to run every means of transportation on the rail, by advocating that there is universal, absolute freedom found only on the rail. What kind of liberty could they pronounce having in a totalitarian state of Communism, in which any other theory than Communism is never permitted? Those heretics who keep asserting some other theory are destined to be put into jail or death, after being dragged as culprits through the street. In Russia or any dictatorial state, you are always watched or followed everywhere you go; so you could not speak of your mind or ask any one of some facts. In such a country as they say there is real liberty in society where the people have economic equality, and yet where you could not say a word or advocate any other theory, how could freedom be found, universal, all people's freedom? Could we find any other freedom than that of being able to run on the rail? Marxists preach us that the history of mankind is the history of struggles, its only aim is to defeat the enemy, and that one can make progress and objectification of oneself in struggling against authority. Communists maintain that everything in the universe will be under constant change; and no progress would be made except by the rule of dialectic. But, in accordance with this dialectic theory, Communism will in time be conquered by some other new theory or be doomed to perish from this world. If not, it will surely be transformed into a very different one. Moreover, would other races that were conquered under the name of "emancipation" ever acquiesce in following the conquerors?

On Dec. 11, 1620, the Pilgrim Fathers managed to get on to the American continent on board the Mayflower, seeking for religious liberty, and braving the perils and hardships on the sea. In Massachusetts, in 1629, they established the Heavenly State which had been

a long hope for the Puritans. Every member of the community was asked to keep strictly to the commandments of God and natural law. They were not allowed to deviate from the creed, and had an earnest desire of keeping everything in order—for example, personal life or political view — in the light of God. In the New Zion state every member should be a Puritan, and none but the Puritans could hold any official post, because the believer in Puritanism alone was given political rights. Those who advocate heresy were banished from the "Kingdom of God."

Can't we suppose that Puritanism and Communism have many similar points to each other? Neither of them gives the people any permission to believe or behave according to their will. Both restrict the actions and thoughts of the people. Whatever the people do or think right is under strict control on heavy penalties. Lenin tells us that there can exist true liberty only in a Communistic state, where the people can enjoy economic equality, without which such liberties as bourgeoisie are proud of would be nothing but a mere phantom of liberty. If it is so, in a Communistic state where heretics or freethinkers will have their doom of disappearance or destruction, can it be announced loudly that Communists can have every kind of freedom to do, to think, or to believe? They have simply a kind of "liberty" sufficient to run on the rail of Communism. Could they, being tied to running on the rail, fly up into the air or submerge into the sea? That is to say, the dwellers in the happy "Eden of Marxism" have no freedom to think of, to study, or to advocate a new theory. Water will go bad that does not run. Can we not suppose that they are also doomed to go the same way of destruction as that of Puritanism?

We can by no means assert that any kind of thought, theory, or concept of liberty, is absolutely right for ever, permitting no alteration. Its content and definition are not allowed to ossify for ever, but must keep developing with the advance of the time. Who can tell that Russia boasting today of its all people's universal freedom will not be doomed to give up its so-called liberty based on economic equality a hundred years or two later?

We should by every means achieve real freedom with manly courage enough to deny, defy, and conquer the violences of a revolution such as those found in Russia. We must win every kind of freedom both in the negative sense and in the positive freedom based on no violence, and also freedom from violence. We should protect this true liberty with courage and at the same time should try every means to construct and protect our peaceful, economically equal country of democracy. As B. Russel advises, we often forget to keep stern watch over our dearest treasure of freedom, just as we sometimes do so over the worth of air. Instigated by the totalitarian idea of Communism, we are often apt to forget the value of our system of freedom. As K. Marx prophesies, will American democracy fall to earth on account of bourgeois system of democracy? Nay, with the advancement of civilization, we will be able to acquire what we hope for, getting rid of inevitable vices due to the Capitalistic regime. We hope that, not with the totalitarian system of dictatorship, but with the democratic system of Capitalism, we should make a splendid march toward the happy life in the future.

DEMOCRACY

Today democracy is the mythical word of our age, because Capitalists and Communists proclaim each other that theirs is the best democratic system, even if their first intention on the way to power is to imprison or kill their opponents. Each, in fact, represents one aspect of the same system of government and both of them wish to justify themselves in the name of the rule by the people. There is, however, as K. Becker points out, nothing in human history to permit believers in democracy to kill each other in its name. Since democracy is a system of the "rule by the people" they are persuaded that they are theoretically the rulers. Under the democratic rule, the citizen can choose his representatives to effect the common will, and can act freely in accordance with established forms and his will, and can appoint or recall his rulers, and also can enact or revoke the laws through the representatives, by which the community is controlled. So it is necessary in democracy that the citizen should be so much trained as to exercise his rights or judgments rightly according to his mental and economic conditions. Unlike autocracy which can impose its own ideal systems and social regulations from above, true democracy must get its initiative from below. Government by the people cannot work well unless the people themselves participate in finding out their best method of administration. Modern liberal democracy has its base on a philosophy of universal truths. Its fundamental idea is the worth, dignity, and creative capacity of the individual. So its aim is the "maximum of individual self-direction, and the minimum of compulsion" by the state. And it relies so much on good will and rational discussion on the part of the citizen, that he believes that he can choose single-minded, efficient, at any rate, honest and zealous persons as his representatives. In such a society there would be no privileges, no advantages, to excite jealousy. Anyone would be given an opportunity for useful public service, and all governmental posts should be open to all alike. Equality would produce a sense of social solidarity, would cultivate refined manners and increase brotherly love. At any rate, the ideal of democratic doctrine was bright and splendid, as W. Whitman sings in his poems or "Democratic Vista."

The primary idea of democratic government was that the citizen was capable of managing his own affairs. The Athenian Democracy as conceived by Pericles (495?-429 B. C.) had a free people highly civilized and pursuing wisdom, free from superstition and oppression, and helping always to emancipate the oppressed. Democracy was an idealistic conception: the belief in reason, in the free pursuit of knowledge, in justice to the weak, and in the desire to be right, and in the hatred of violence. Aristotle (384-322 B. C.) emphasized that democracy should be based on equality and the free men and the poor, who were the majority of the people, should be invested with the power of the state. Slaves, however, were excluded from his ideal of democracy. His people were supposed to be rational citizens sufficient to understand the interests in conflict. Indeed his citizen should be a man of good will toward each other and make concessions for workable

compromises, and also should be a sound judge of good policy. Aristotle says that the aim of every good government is that "the inhabitants of it should be happy." He defines democracy as follows:

"A democracy is a state where the free men and the poor, being in the majority, are invested with the power of the state. The most pure democracy is that which is so called principally from that equality which prevails in it; for this is what the law in the state directs; that the poor shall be in no greater subjection than the rich; nor that the supreme power shall be lodged in either of these, but that both shall share it. For if liberty and equality, as some one supposes, are chiefly to be found in a democracy, it must be so by every department of government being alike open to all." (Politics. Bk 4, Chap. 4)

His underlying ethical basis is the conception that all men are created equal, and that government exists for the purpose of protecting them in the exercise of certain basic rights. Afterwards in the eighteenth century the ideal of democracy was more reinforced by endowing the citizen with natural law and inalienable rights.

Today any idea or thought, new or old, is expected to be subject to transformation in the future. That is to say, change is inherent in democracy itself, both in American democracy and democratic Communism. Some of ideologists or authoritarians believe that they are possessed of absolute and final laws which defy any change, and yet they fear any change might be for the worse. However, alteration will take place in everything with the advancement of civilization. There has appeared an extremely complex society in which very intricate and impersonal economic forces, stronger than good will or rational direction, have brought out an increasing concentration of wealth and power in the hands of a small number of citizens, and have spoiled the essential liberties of most of the people. Some of the radicals dared to assert that the present system of democracy was nothing but an illusion, and stopped applying the principles of liberty to the economic and political system. Democratic institutions and democrats' faith in the worth and dignity of the individual have come to be ignored and the traditional conception of individual liberty has become invalid. What the citizen needs is an opportunity of acquiring the economic security that is essential to independent living. His only necessity is to survive in economic competition. His belief is that acquisitive instinct is the only human motive of action.

Communists believe, as Engels says, that economic motives are so strong that the economic situation of society alone determines the political pattern and cultural development of society. So they warn against this acquisitive instinct, as it will lead the people to accept the fallacy that competitive success is a proof of character. They also abuse Capitalists, saying that they are distorting the real value of civilization and warm, generous human fellowship. The strains and conflicts that have arisen from accepting competitive success as the primary test of mankind are afflicting all capitalistic societies. In fact, effective political control has been seized in the hands of upper classes, and political equality could not safeguard the interests of the people. Individual liberty has proved

inadequate in the economic realm because it has failed to bring about equality of possessions and opportunity, without which political equality will come to nothing. So Marxists argue that private property has become a great obstacle to achieving a truly democratic structure, and capitalistic control of the means of production gives them an "impersonal power over the lives and fortunes of millions of people" — Power which they are quite unable to use for the public good. The system of free enterprise has given much pressure on legislations and public opinion. So there has burst out a profound discord between democracy as an ideal and that as a reality.

Karl Marx (1818-1883) was much moved by the miserable conditions of the lower classes, under the fair name of whose survival and improvement, the living human beings were oppressed and treated like cattle. So he taught them to fight against authority for their survival. He was an emancipator of the oppressed. He set them to denounce the existing order in the name of the avenging forces of the future. Marx was a Utopian, who imagined that his Communism could bring about a peaceful Heavenly State where anyone could live a happier life with more freedom and equality just like the life in the pre-historic age. Marx was a prophet who foretold that a time would come for proletariat to acquire as a result of a revolution the leadership of the state; that, after the disappearance of bourgeois society, the conflict would disappear for ever, the pre-historic period would be completed, the history of the free human individual would at last begin, and workers would enjoy the fruits of their labour. He was a revolutionist, who argued that workers should wage an aggressive war on bourgeoisie, because bourgeois society is the last form which antagonism takes. He was a theorist of class struggles, whose theory of dialectic materialism made its way to undermining the existing structures of government of the world. He was a patron saint to workers. He advocated to them that, to remove the heavy pressure of Capitalism, they should make a war against authority for their survival, because what bourgeoisie preach is nothing but the sanctity of private property. His convictions and insinuations:

"The Communists are not a party, but the self-conscious vanguard of the proletariat. The Communist Party must therefore be formed to function as a political and legitimate elite of the people, enjoying its confidence in virtue of its disinterestedness, its super training and its practical insight into the needs of the immediate situation, able to guide the people's uncertain steps. A successful revolution could be made by means of a coup d'état, carried out by a small and resolute body of trained revolutionists, who, having seized power, would hold it, constituting themselves the executive committee of the masses in whose name they acted. This body would function as the spear-head of the proletarian attack. Because the broad masses of the working class after years of bondage and darkness could not be expected to be ripe either for self-government, or for the control of liquidation of the forces they had displaced.

Marx insisted that, by the policy of gradual expansion and the slow conquest of political

power, all workers would become masters, securing authority and good economic conditions. Moved by the miserable conditions of workers, and reading Aristotle's phrase that the poor and the free men are the majority, and that they should share the supreme power with the rich, he wished to relieve them from the oppressions of Capitalistic democracy, and by changing Hegel's dialectic into his theory of dialectic materialism, justified the revolution and class struggle, by which he tried to destroy the existing order of Capitalistic system, and dreamed of the advent of an Eden for workers and the oppressed. His exclamation:

"The workers have nothing to lose, but his chains. They have a world to win.

Workers of all lands, unite!"

In his "Land of Canaan", every man, emancipated from the tyranny of nature and Capitalism, can develop his capacities to the fullest extent; real freedom will be realized; human history in the true sense will open, he believed.

He insisted on the necessity of dictatorship and an inevitable class war, but these things have come to strike a heavy blow on this "Land of Canaan." These Canaanites can not say a word against the dictators. Although they are told that they are freest, they are always under strict control just like those in the Puritan Paradise were. None but Communists have election rights and can be government officials, and even Communists can not say against the policy of the dictators. However, Marxian doctrine of dialectic process has made a great contribution to the growth of Communistic countries. He indeed created a quite new attitude to social and historical problems, and opened new avenues of human knowledge. He made a scientific study of evolving economic relations and its influence on the lives of individuals and society. However, politics is a matter of social organization; its business is to find means by which man can live happily together. It is not only concerned with economics, but also politics. Democratic power can only operate within a frame work of consent. There must be a common sense that all citizens have in some degree the opportunity of contributing to it. Moreover, society is always in a continuous process of change, and each new development brings out new creeds, which banish old ones. Change is inherent in any theory. The holy precepts of Communism are also doomed to change. We, however, should by all means endeavour to evade resorting to violence. We should share our belongings with those have-not. By employing the best knowledge available, we should put its adjustment into practice. Failure in the attempt to cure evil points does not always mean abandoning this task. We must have time for experiment, time making mistakes and correcting them, time for the slow development and legislation of public opinion into a law.

Marx's Utopia is that of the pre-historic age, when all living things including mankind could, he imagined, live together happily. However, there might have been among them some frightful fear of being attacked at any moment by some ferocious beasts. It is supposed that it was not so happy or blessed as in Eden of Adam and Eve. Today in Russia, there have emerged a clique of leaders under whose dictatorship the people are

supposed to enjoy Communistic freedom. Marx instructs us that, owing to the disappearance of "state and class", there will be no freedom required in classless society, because all the citizens have it, and so need not request it. Can it be true? Any dissenters or free thinkers are in the mercy of the dictators, and may at any time be banished into a concentration camp in the far North, or may vanish for ever. The citizen can't speak of his mind freely unless he is ready to get a fair trial in the kangaroo court.

More's Utopia has in the story an imaginary island, where politics, laws and social life are perfect. Its goods are shared by the community; there is no money or crime; the citizens are living a peaceful simple life. How is the state of things in Russia today? Its laws and social life may be perfect in the confined sphere of Communism. No Russian can go abroad as easily as the citizen in bourgeois society can. Its community is shut up closely within iron curtains or bamboo ones. The people are always under strict watch, because the dictators fear that any different kind of ideology might invade their "holy" Communist land. The citizen is persuaded from head to foot that human history is that of struggles, and to win in the battle is the last thing to him.

Might not the conquered races under the vigilance of Russian Communists stand up against their conquerors? As that is the case in Czecho-Slovak, would the people in the conquered land pass the matter of life and death out of consideration, believing that theirs, as the Saint of Communism prophesies, is the most peaceful Canaan in the world? Marx argues that bourgeoisie would not make concession in handing over their authority and wealth; so you should appeal to violence as the best step to Communism; by making use of force you could achieve the revolution. As Confucius says in his "Analects", violence leads to violence. However powerful and atrocious the force of G. P. U. (the Russian Secret Police) may be, who can tell the conquered races might not rise up against their rulers? Marx convinces us of a new stage of civilization, in which, after the disappearance of bourgeois society, the Heavenly state of workers will begin. However successfully the Communist clique of dictatorship can relieve the oppressed, and however finely an Eden of Communism will be accomplished, dictatorship and its clique may perhaps control the government. As a result, the "executive committee of the masses" might at any moment turn out to be exploiters themselves. In the community of dictatorship the ruling class might at any time become a kind of bourgeoisie, or rather something of a propertied class, although the prophet Marx preaches us that there will come out classless society where no class struggles will ever be fought.

Our system must not be that of dictatorship. Such dictators or authoritarians as Hitler or Mussolini went their way to destruction. Therefore, not to fall into despotism, we should maintain our system of democracy, by listening to the opinions of our opponents, and correcting our defects, and taking responsibility of our doings, and making compromise between the parties.

END

(1970. 2. 10)

CHIEF REFERENCE BOOKS

- Critical & Historical Essays by T. B. Macaulay Vol. I. London, Dent & Sons 1920
 Euripides & his Age by Gilbert Murray. Oxford Univ. Press. 1955.
 English Revolution by G. M. Trevelyan. Oxford & Maruzen. 1956.
 Democratic Challenge, by F. Williams. Appolon-sha, Tokyo. 1965.
 From Puritanism to the Age of Reason by G. R/Cragg. Cambridge Press. 1950.
 History of Freedom of Thought by J. B. Bury. Oxford & Maruzen. 1957.
 History & Anthology of American Literature by L. B. Brown. Hokuseido. 1967.
 Jane Eyre by Charlotte Brontë Tokyo, Kenkyusha. 1935.
 Karl Marx (3rd ed.) by Isaih Berlin. Oxford & Maruzen. 1963.
 Liberty in the Modern State by H. Laski. Harper's & Brothers (the Viking press) 1946.
 Liberal Imagination by Trilling. Tokyo Hyoronsha. 1963.
 Modern Democracy by C. L. Becker. Tokyo Appolonsha. 1965.
 Social Contracts & Discourses by J. J. Rousseau. London, E. P. Dutton & Co. 1923.
- | | | |
|---------------------------------|---------------|------------------|
| 自由の問題 | 岡本清一 | 岩波新書(東京) 1969. |
| 人間の自由について | 高桑純夫 | 岩波新書(〃) 1968. |
| 新しい共産主義批判 | キリスト教統一協会 | 光言社(〃) 1971. |
| 民主主義思想の力 | ロックフェラー特別研究報告 | 米国大使館 1960. |
| ラスキー 近代国家に於ける自由 | 飯坂良明 訳 | 岩波新書(東京) 1964. |
| マルクス主義と実存主義 | 赤本和夫 | 人文書院(〃) 1965. |
| 政治と教育 | 塩尻公明 | 社会思想研究社(〃) 1952. |
| Whitman: Democratic Vista | 木村艸太訳 | 日本読書組合(〃) 1946. |
| J. Dewey: Democracy & Education | 帆足利一郎訳 | 春秋社(〃) 1950. |
| イギリス文学と詩的想像 | 尾島庄一郎 | 北星堂(〃) 1966. |

ゼラチン調理の研究(第1報)

丹下 ナホエ 村上 久美

今治明德短期大学

Studies on the Cookery with Gelatin (Part 1)

Naoe TANGE Hisami MURAKAMI

Imabari Meitoku Junior College

I 緒 言

ゼラチンを用いて作る調理、いわゆるゼリー調理はデザートから前菜に至るまでの広い範囲に種々用いられる様になった。これらの調理に於て出来上がりを型から出すのに型ごと温湯に浸して手際よく出す方法が一般に行なわれている。しかしそれが案外熟練したもののかんでなされていて、なれないものは案外うまくゆかないものである。それでこの場合、調理に適した温水の温度、それに浸す時間はそのゼリーの冷却温度、冷却時間によってちがう。これについて放水量を測定しながら調理に適した温水温度、時間の関係などを検討してみたので報告する。

II 実 験

1 試 料

ゼラチン：ゼライス粉末（宮城化学工業KK）

水にその3%のゼラチン粉末をふり入れ、5分間浸水させた後90°Cまで加熱し、次に20°Cまで攪拌して冷やし、容量100ccの型に70ccずつ流し入れて、氷水にて冷却させ、試料とした。

2 用 具

硬度測定にはカードメーターを使用。

3 型より出すため浸す温水温度、その時間についての検討。

調理したゼリーはゼラチンが溶媒に溶け、それが凝固即ちゲル化したものである。この

ゲル化は系の構造化であることは現在一般に認められている。

ここ30年の間にゼリーの構造は、X線法、限外顕微鏡観察、電子顕微鏡などによる方法、その他いくつかの精密な方法によって調べられている¹⁾。

95~98%もの多量の液体を含んだゼリーが凝固するのはそれが網目構造をもち、液体はその中の繊維状粒子に結合されており、かつ、それらの間で物理的に動くことができなくなっているのであって、即ち繊維または糸状の粒子が密なかたまりを作ると云うのではなく、むしろからみ合っていて、液体は粒子の間に束縛されて流動しなくなったものである。

でき上がったゼリー、即ち凝固したゼリーを型から出すには、温水に型ごと浸して型からゼリーが自由に離れる様にして振り出すのである。温水に浸すことにより、ゼリーがゲル化して型に密着している部分はその温水の熱によりゾル状態になった瞬間をとらえて型より出すのであって、ゾルになった部分を最少量にとどめ、しかも型よりゼリーが無理なく出せると云うことに調理に於ては困難なところがある。

ゲル化したゼリーの中の液体はゼラチンの分子集合体の排列が系統的に発達して網目構造となり、液体は不動化しているのであるが、これが温水の熱によりゾル状になって放水するのは、その部分のゼラチン粒子が強いブラウン運動を行っており、その集合体は溶媒分子の衝突によってたえず分散されている。即ち、網目構造のしっかりした結合はほどけてしまい、液体は放出されるのである。

一定のゼラチン濃度のゼリーについて云えば、ゼリーを浸す温水温度が高くなり、時間が長くなるほど放水量は大となる。

試料の内部温度が6°C、7°C、8°Cのそれぞれの場合、温水温度、温水への浸水時間を変えて放水量を測定した結果は第1表、第2表、第3表に示す通りである。いずれも、試料は目的の温度になってから1時間経過して測定したものである。

第1表 温水温度35°Cの浸水時間と放水量の関係

内部温度 浸水時間(秒)	放 水 量 (cc.)		
	6°C	7°C	8°C
4	—	0.50	0.60
5	0.25	0.65	0.72
6	0.35	0.70	0.80
7	0.40	0.75	1.00

第2表 温水温度40°Cの浸水時間と放水量の関係

内部温度 浸水時間(秒)	放 水 量 (cc.)		
	6°C	7°C	8°C
2	0.35	0.50	0.60
3	0.40	0.60	0.60
4	0.50	0.70	0.70
5	0.65	0.75	0.90
6	0.70	0.85	1.10
7	0.80	0.95	1.20
8	1.00	1.05	2.00

第3表 温水温度45°C の浸水時間と放水量の関係

内部温度 浸水時間(秒)	放 水 量 (cc.)		
	6°C	7°C	8°C
2	0.60	0.70	0.70
3	0.70	0.75	0.85
4	0.72	1.05	0.90
5	0.75	1.30	1.15
6	0.85	1.35	1.90
7	1.15	2.05	2.50
8	1.80	2.80	3.65

実験結果から、ゼリーの冷却温度によって、型より出す適当な温水温度、浸水時間はそれぞれちがうことがわかる。放水量0.3cc. 以下は型より出すのに勢よくふらなければならぬなど調理上好ましい状態ではない。型より出す時の温水温度、時間の最も一般的なものは、その放水量からみて、また技術的から考慮した上で妥当なものは40°C の温水では5秒間浸すものが望ましいようである。

4 ゲル化の時間と硬度及び型より出す時の放水量について

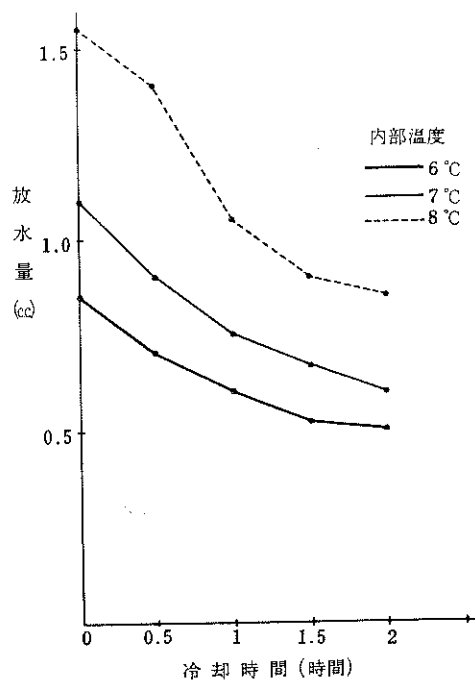
ゼリーの凝固の状態は時間の経過とともにそのかたさを増す。しかしゼラチン濃度が大となればその硬度(剛性)は増し、内部温度が高くなれば硬度は減少する。また一般について云えば、ゼラチンゼリーの剛性は、その pH に対しては相当広い範囲で関係しないと考えられる。Gerngross の説によれば、ゼラチン3%の剛性(針入度測定器により測定)は pH 4.6~8.2の間で不変であった。このことはゼラチンゼリーの構造形成にあずかっている力は Coo^- と NH_3^+ との間に働く静電気力ではないことを示すものである。なんとなれば静電気力は pH に依存するものだからである²⁾。

このことから本実験に於て試料は普通の調理で用いるもので行ない、pH は測定しなかった。

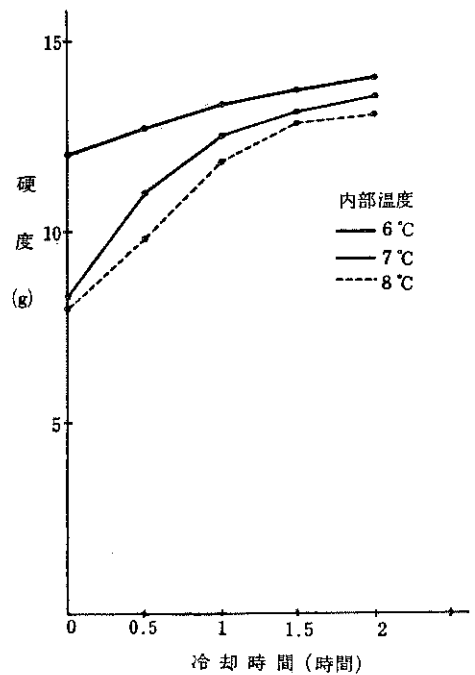
ゲル化の過程は不連続なものではなく、粒子が徐々に集合していくものであることがわかるとしている。X線図型はゲル化の間に变化する。ゲル状態が結晶性構造の境界のはっきりした輪状の特性を持っているのに反し、ゾル状態では無定形の構造を示している。言葉を変えていえば、ゲル形成中は、ゼラチン分子群のはっきりした規則正しい排列または組織化が系統的に発達しているということである³⁾。

ゲル化が起こるには一定の時間が必要であるが、ゲル化した後はゼリーの内部温度が一定であれば、時間の経過と共にその凝固力は増す。即ちゼリーの硬度は増加する。また放水量は時間が長くなるに従って減少することがわかった。第1図、第2図は内部温度6°C、7°C、8°Cのゼリーの放水量、硬度を時間ごとに測定して示したものである。(但し温水温度40°C、浸水時間5秒とする)

Dahlberg, Carpenter, と Hening は、アイスクリームに用いる薄いゼラチンの溶液は、ゲル形成に長い時間がかかることを報告している。また彼らは多くの場合、ゲル形成とそのあとしばらく放置するのに18時間を費している⁴⁾。



第1図 ゼリーの冷却時間と放水量
(ゼラチン濃度3%)



第2図 ゼリーの冷却時間と硬度
(ゼラチン濃度3%)

第4表は内部温度4°C, 5°Cのゼリーを長時間冷蔵庫で保ってその放水量, 硬度を測定したものである。

第4表 冷却時間と放水量, 硬度の関係

内部温度 時間(時)	放 水 量 (cc)		硬 度 (g)	
	4°C	5°C	4°C	5°C
0	0.60	0.70	15.6	12.1
1	0.55	0.60	16.8	13.4
5	0.50	0.55	17.3	14.0
20	0.40	0.45	22.7	20.9
24	0.25	0.30	24.7	22.4

(温水温度40°C 浸水時間5秒)

学校の調理実習でゼリーを作る場合, ゼリーの冷却時間は30分から1時間位までしかないときが多い。それでゼラチン濃度を必要以上高くすることがしばしばある。しかし家庭などで作るときは, 冷却時間が充分あるので, その逆にゼラチン濃度を極めて低くすることも可能である。調理では同じかたさをもつゼリーならばゼラチン濃度が低いものの方が美味とされている。

上の実験からも分るように一定のゼラチン濃度に於ては, 冷却温度即ち内部温度と冷却時間の両条件により, ゼラチンゲルの凝固状態がそれぞれちがう。内部温度が低く, 冷却時間が長くなるほど放水量は小となる。

Ⅲ 要 約

1 ゼリーを型から出すには、ゼリーの冷却温度即ち内部温度のちがいにより、温水温度、それへの浸水時間をそれぞれ考慮する必要がある。実験結果から見ると、最も良好な状態で型から出すことの出来るのは、放水量が0.6~0.7cc附近のものである。

2 放水量は上記のようにゼリーの内部温度によって変化することは勿論であるが、その冷却時間にも大いに関係する。即ち同一内部温度をもつゼリーでも長時間冷却したものの方がよく凝固しており、硬度は大となり、放水量は時間の経過と共に小となる。

本実験の放水量並びに硬度は変化しつつある状態の瞬間をとらえて測定したもので、また室温にも相当影響せられ、実験は極めて困難であった。従って実験の数字は多少の誤差を伴うことは免れなかった。今後は数多くの実験を重ねてより正確なものと思いたいと思う。

引 用 文 献

- 1) B. ヤーゲンソン他：コロイド化学，培風館，323 (1967)
- 2) B. ヤーゲンソン他：コロイド化学，培風館，329 (1967)
- 3), 4) B. Lowe: Experimental Cookery, 184 (1958)

(昭和45年10月15日受付)

経済成長からみた米の生産調整による米質向上と 消費の動向について (第 1 報)

米の生産調整と米質向上

真 木 胖

今治明德短期大学

About the Progress in Rice Quality and the Consumption Trends based
on the Production Adjustment of Rice in the Economic Growth
Report No. 1.

The Production Adjustment of Rice and the Progress in Rice Quality

Yutaka MAKI

Imabari Meitoku Junior College

結 言

いまや我国の農業は目まぐるしく大きな変動をしつつある。米の生産過剰対策など有史以来の一大転換期を迎えて、多くの諸問題を抱えている。全国における農家は約 500 万戸（昭和45年度）で昭和42年度は 524 万戸（年間約 8 万戸、年率 1.4% の減少率を示す）、あった、工業的な地域や僻遠的な地域はその減少率も高いのである。昭和35年度と42年度の比較すれば専業農家が47%減少して、二種兼業農家が36%増加している。農家の人口は昭和42年度に 2,695 万人で前年と比較すれば 68 万人の減少をしており、農家の男女別は 4:6 で女性が多く、男性の60才以上を女性に加えると70%になるので老令化と女性化の傾向が次第に強くなってきた。農家の労働力が減少し労賃は年々高くなり、田植賃の平均は工業地域で昭和44年に 2,500 円、農業地域で 2,000 円になっている。動力耕うん機は2戸に1台であり、動力防除機は3戸に1台の割合で普及している。米は日本食糧の中心であるが、国は古米、560 万トンの余剰米について、その対策をいそいでいる。先づ供出米の米価すえおき、昭和44年度には 170 万トンの自主流通米制度の採用と等外米の自由販売、35 万ヘクタールの水田休耕地制度（転作）の立案と食管法および農地法の一部改正などを行ない、食糧不足時代の如き手厚い保護政策は次第に陰をひそめ、一歩づつ後退している。ので前途はまさに、けわしいものがある。食糧経済における、体質改善は、先づ農業の省力化によるコストダウンである。規模の拡大、管理作業の機械化による合理化と作業の簡

素化を基本線としている。さらに最近では農薬残留毒などが社会問題として世界的に出現しており、特に消費市場で商品性の高いものが要求され、農薬残留許容量や農薬残臭などを考えながら病虫害防除の徹底をはかることが急務である。

I 米の生産調整と米質向上

米の生産過剰による古米対策について生産者より高く買入れて、消費者に安く販売すれば、その差額は逆鞘現象を生じて食管赤字となっている。これを正常にするためには生産調整をするのが早道であり、さらに品種や耕種方法等により米質の向上をはかり食味をよくすることが最も大切なことである。

(1) 総合農政は如何に芽を伸すか

米の過剰対策が直接の契機になって総合農政対策と云う新しい標語が打ちだされた。これは農政上からみて基本的注意事項であり、特に総合農政の実態について、その在り方と内容を検討した。農業だけで解決できない場合もあり、ただ農政審議会の答申についても、そのいくつかが指摘できる。農地改革の如き一大転換期がきつつある、農基法から農業構造改善事業と施策は次々に出てきたが、本格的に日本農業を変革するほどのものは、なかった。経済成長の過程で農業労働力の減少という変化が持続的にすすんだ。農業構造政策上からみて作目構成の近代化が不徹底なことから、新しい画期的な農基法の選択的拡大として考えられたが、具体化による方法が、現在のものを積極的に作目構成の構造的な転換を行なっていく方向とは、まさに現実とは反対の行きかたをしてきたので作目要因の構造転換は放任された結果であった。

米の過剰生産は当然のことで構造政策の不徹底によって生じたものである。米の生産過剰は短期に在庫を長期に作付縮小による転作を考えた2つの考え方がある。米の在庫処理は国の財政に影響し、作付転換は、その性質上からみて長期計画によらねば解決しがたい農政問題である。即ち米作転換の重要性は日本農業の一大変革をきたす転換期がきていると考えられる。

昔から米作中心の日本農業は昭和30年頃から次第に食糧の消費構造が変化し、米に他の作目が入り、持別に米作転換期の作減はせず、どこまでもプラスアルファ的な奨励に終って基本構成の政策的な転換にはならなかった。現在までは物量増産対策にすぎず、構造政策としてはマイナスである。

主作目の転換はきわめて重要なことで大きな決意と時間や資金に技術的条件および価格の有利性が確定せず、米作は経済的にも技術的にも諸情勢からみれば、基幹主作目を米として他のものに転換させない状況がつづいた。

選択的拡大の行動をした農家によって米の生産過剰をきたした結果を出現した、国は総合農政で新しい政策的な転換をすることが必要で一大決心をせねばならない。

適地適作による立地条件は地域別生産目標の確認が重要で、実際に行政誘導力がどの程度あるかは従来からの画一的な増産施策を越えねばならない。一方貿易政策に対しての食管制度や米価について国の食糧自給度は高いほどよいと云う思想であり、さらに家畜飼料を如何にすべきか、現実には輸入飼料でささえているが、価格変動の烈しい鶏卵が国際的な

価格に近い作目で近代化されているからで総合農政ではこのような理論的な事実を積極的にとりいれることもよい。

米が現在の約半値の国際価格水準になれば輸出もできるが、米作を主幹作物からはずす時には目標の米価水準を年次別に実現していけるだけの条件を形成せねばならない。米による所得の減少は、米価を下げて食糧法を変えることになる。現在生産性の水準が絶対に高い米作経営は実現しないので、米価を下げられるような場合には農政体系の諸条件を積極的に考えて行くべきである。

第1表 経営規模拡大による生産費と収入（10アール当たり 単位 円）

耕作面積別区分	労働費	農具費	肥料費	防除費	水利費	建物費	賃料料金	その他	合 計
30 a 未満	35,614	5,691	4,127	1,832	2,354	1,644	3,567	5,146	59,975
30～ 50	27,962	8,077	5,042	1,869	1,601	1,942	1,944	4,604	53,041
50～100	22,417	8,042	5,099	1,732	1,711	1,701	702	4,965	46,369
100～150	25,204	6,546	4,371	1,519	2,490	724	278	3,741	44,873
150～200	14,300	5,169	3,453	1,532	1,051	2,014	—	4,092	31,611

耕作面積別 区 分	1戸 当たり 作付面積	10アール当り 主 産 物		10アール当り 労 働 時 間			動力運 転時間	畜役時間	家族労働報酬	
		収 量	価 額	家族	雇用	計			10アール 当り	1日当り
30 a 未満	23.9	494	66,465	171.5	24.0	195.5	6.6	—	37,631	1,755
30～ 50	39.8	482	64,563	161.0	11.5	172.5	12.3	—	37,361	1,856
50～100	71.8	495	66,241	134.6	16.0	150.6	16.1	—	39,771	2,364
100～150	114.0	535	71,898	122.1	16.8	138.9	15.6	—	39,009	3,211
150～200	160.4	551	69,118	85.3	6.0	91.3	12.3	—	50,797	4,764

食糧の自給からみた食糧維持はそのままにおいて、他の作目に転換をするように方向をかため、経営規模の拡大による農家の減少は消極的な施策である。これにともなって離農対策が考えられ、農政だけでは離農促進が出来ないので限度があるから通産、建設、厚生、労働等の各方面における行政分野からも歩調を合わせた総合農政への協力的な施策が必要で総力をあげて実施すべきである。

従来の農政から早く脱皮して、将来の担い手に焦点をしぼることが重要で総合農政に対する農政転換の方向である。

選別政策から構造政策へとすすめられている自立経営指向農家の分散しているものを組織化し、集団的生産組織からさらに地域的な組織化を行政的に誘導せねば期待が出来ない。米作転換の実現は、その地域における基盤整備を行なって、米作一遍投から脱皮して、社会的人間関係を取りいれた総合農政の体系に転換してゆく再編成の農村構造を打ち出す政策が必要である。適地適作目の有利なものについて転換し、地域的に組織化して計画的な共同出荷に重点をおくのがよい。米は食味のよい優良品質の品種を選定し、地域別に決定すれば、さらに等級によっても保管米の可否をきめることが出来て、作付も自然と減反することになってくる。

(2) 米の不足時代から農地法と農業経営

農業行政の実行性は非常にむづかしく、特に米が日本で始めて、人口が多いのに余り出したので、とまどったわけで、10年前から余る予測は考えられていたが、こんなに多量の米が急に生産過剰になるとは予想をしていなかった。この現象を避けるべき対策も当然たてられていなかった。米不足を予想した食糧政策が前提であったから一層、生産性を高め余る米作主義になってきた。

歴史上から日本の米作をながめると、徳川時代の消費経済は自給自足であった。足りない時には人口の調整でまにあわしていた。

開国明治の時代になってから、輸出農産物になり、米も主要産物になっていたが日清、日露の戦争頃から不足時代が続く、多少の変動はあったが、大正時代となつてから急に米不足が甚だしくなり、米の価格が総ての物価の基準価値を示すこととなり、米の不足時代が続いて米価の上昇をよぎなくした。次いで、米の国内生産を奨励し、研究をすすめる増産対策などのかぎりをつくした。更に台湾や朝鮮にいたるまで米の増産をすすめた。ようやくにして国の食糧確保に成功したが、昭和時代の世界恐慌がまわうけていた、この経済的な不況時代に遭遇して、米がやっと、この影響で余ってきた、この生産過剰の対策を考え中に戦争時代を迎えて昭和14年頃から米不足の状態となり、今日まで続いている食糧管理法が昭和17年にできたのである。現在までの過去における日本の食糧は昭和の始め頃にほんの少し経済不況時代を生じて米が余ったけれども、これ以外は米不足時代が続いている。この不足した米を麦類の増産と輸入米で補足して食糧確保が出来ていた。

日本は米が一番重要で、いつも足りないんだと考えて、食糧は米さえ確保しておけばよいと思った米作偏重政策が歴史上からみてその時代の農政にうかがえる。当然現在の米が生産過剰時代となつてきたので何に転換していくかを新しく考えねばならない。ことに食糧難の時代を経験して過した人々は若い者の想像ができないほどに強い米に対する執着心をもっている。消費者の立場からいって、米は生活上に最も重要なもので、米価の問題や米不足のために代用食ですます食事は困ると云う考えが強かった。なお日本における食糧の半分は米に依存しているので米作生産の安定感を持っていたので、米に対して少し過大評価であつたと思われる。

戦後に農地法と言われる土地改革が行なわれて、日本の農地は、その所有型体を画期的に根本から変えることが出来たが、それが農業経営とは結びついていなかった。農業経営の変革は急にできない。特に集団化した地域的組織をつくるには永い年月を要する。

農業構造改善事業に対する批判

第2表のa、 農業構造改善の特性

よ っ た こ と			わ る っ た こ と		
項	目	割 合	項	目	割 合
規模の拡大ができた		29.3%	規模の拡大ができなかった		—%
労働力が軽減された		74.3	労働力が軽減されなかった		0.7
収量が安定した		15.7	収量が下がった		4.3
兼業に安心して従事できる		14.3	経営の支出がふえた		22.9
その他		7.1	その他		5.0
別がない		7.9	別がない		67.9
計		148.6	計		100.8

第2表のb, 農業構造改善を実施しない人のアンケート

項 目	割 合	
規模が拡大できる	20.0%	実施すればよかった (15.0)
労働力の不足の軽減	23.6	
新技術導入	1.4	これから実施したい (33.6)
近所がやっている	1.4	
そ の 他	2.2	
計	48.6	
現状でよい	11.4	実施する必要なし (28.6)
共同はきらい	5.0	
技術導入不十分	0.7	
負担が大きい	10.0	
そ の 他	1.5	
計	28.6	
わからない	22.8	わからない (22.8)
計	100.0	計 100.0

農地改革は土地所有の変革であり、経営問題とは関係がなかった。即ち民主的農村を作るために土地所有の分散をしたにすぎない。

農地法は生産性向上の基盤になると考えていた。しかしこれは経営の変革ではなかった。終戦当時は肥料も不足し、農薬や農機具も劣った、技術水準の低い経済状態の不安定な時で生産性の変革的向上を望む経営には無理な時代であった、土地所有の変革がようやく農地法にて、できた程度である。不在地主は土地所有を認めないが、在村地主は1ヘクタールの保有が許された、これを3ヘクタールにしても5ヘクタールにしても、経営上からみて実際に1ヘクタール以内のものが多かったので、小作に分割して作付する場合は自作農経営の意味がなくなる。農林当局では、しかしあの当時に5ヘクタールがよいと言う案を最初に出していたが結局、自作農主義を徹底させるために1ヘクタールの線で決定し、耕作者が土地所有するのが最もよいと云う原則で現在まで続いているために経営上に支障をきたしているのは当然である。

農政審議会では将来理想的と考えられるのは水田5ヘクタール、乳牛で20頭ぐらいが適正規模であろうと思われる。全国の平均で水田は6反ぐらいであるが、東北や北海道では4ヘクタール程度の農家が随分あるので規模も大きなものである。

(3) 米の生産調整の在り方

米の生産過剰による余った古米が約800万トンで、一般の配給米で一年分余りで加工用もいれて、国の一年分を越すという買渡上必要なものである。

昨年560万トンの余剰米であったが今年は800万トンに近い米が余っているので毎年生産過剰米が増加するのみで、輸出や飼料に廻しても余り減少しないので現実に累積増加の傾

第3表のa、年次別の作付面積と収量

調査別 年次別	作付面積 (ヘクタール)	1平方m当り 株数	1平方m当り 全穂数	1穂当たり 玄米量(g)	10アール当り 収穫(kg)	収穫量(t)
昭和37	41,300	14.1	276	1.64	428	176,400
38	41,000	13.9	286	1.51	404	165,600
39	40,300	13.9	310	1.37	406	163,800
40	39,700	14.1	278	1.59	412	163,600
41	39,300	14.1	309	1.40	417	163,900
42	39,100	14.2	316	1.58	460	179,900
43	38,600	14.3	316	1.51	435	167,900

向をつづける問題として、毎年多くなるから、どうしても過剰米の処分と今後の生産を需要に合うような生産調整を行なうことが最も重要な問題点で過剰米の処理と不可分の関係にある。これが緊急を要する総合農政からみた一つの中心課題である。決め手のない困難な対策として、作付面積の縮小を如何にして実現させることが出来るか、その手段と方法である。各県に生産割当てを直接するか、価格を下げて生産を縮小さすかの方法であるが実行しやすい形を考えねばならないが、価格を下げる方法は実行困難である。これは政策的に農業恐慌を作ろうとしている。農家の生活は非常に圧迫され、経済上はむろんのこと社会的にも政治的にも困難性がある。

第3表のb、米の生産調整による愛媛県の転換作物作付面積 (単位: ha) (S. 45)

調査別 地方別	生産調 整面積	水田転 換面積	休耕 面積	飼料 作物	やさい	果樹	豆類	工芸 作物	桑	花き	雑穀	造林	苗木	農業 用地 その他
宇摩地方	142.6	98.9	43.7	16.9	71.6	1.1	1.6	0.5		1.6	0.1	5.5		
新居 //	265.7	98.2	167.5	18.2	59.0		18.0				3.0			
周桑 //	285.9	234.9	51.0	72.7	51.2	1.0	44.5	61.7				3.8		
越智 //	229.9	123.4	106.5	4.4	50.0		31.0			38.0				
温泉 //	541.7	128.6	413.1	32.2	74.8	7.4			3.0	3.2		8.0		
伊予 //	222.3	150.5	71.8	8.5	78.1	9.6	25.0	22.2		1.0		6.1		
上浮穴 //	98.8	62.9	35.9		16.5	0.6	2.0	9.7	8.9		1.7	18.5	5.0	
喜多 //	199.7	163.6	36.1	29.8	57.3	15.2	2.6	25.1	0.7			32.9		
西宇和 //	22.5	20.8	1.7	1.7	1.2	12.1		2.0				3.8		
東宇和 //	223.9	103.1	120.8	42.9	9.8	5.2	0.2	21.3	12.2			11.5		
北宇和 //	245.1	156.7	88.4	33.8	36.3	10.1	5.0	32.4	17.4			10.5	2.2	9.0
南宇和 //	71.9	57.6	14.3	6.5	33.1			15.0	0.5			2.5		
合 計	2550.0	1399.2	1150.8	267.6	538.9	62.3	129.9	189.9	42.7	43.8	4.8	103.1	7.2	9.0
比 率	(100)	(54.9)	(45.1)											
比 率		(100)		(19.1)	(38.5)	(4.5)	(9.3)	(13.6)	(3.1)	(3.1)	(0.3)	(7.4)	(0.5)	(0.6)

生産割当方法は比較的にできやすい容易な方法であり、作付転換を有利にすすめる、さらに休耕田を作って米作を中止する。これには補助金を出すことで、10アールに4万円以内(生産調整奨励補助金額で米を生産しない水田面積、 $X=81円(1kg当り) \times 昭和44年産米の単位当たり基準収穫量で農業保険の支払い基準として決定されているもの、\times 調整水田面積で水田一枚が単位$)と云われている。

この根拠はあるにしても、大きな財政支出になる以外に作らなくても補助金がもらえるので自分が持っておけばよいことになる、また小作料にも影響する、当然人に貸す時は補助金+a型になる。総合農政による農業構造改善で規模拡大をする場合、土地の流動化を妨ぎ、大きな支障をきたし、売らなくても補助金がもらえるので、間接的にも悪影響が生じてくる。

なお、国で買入れする米の買入れ制限をする場合は食管法に關係するが生産調整として一つの方法である。しかし買入れ途中で中止することは、困難性が強いようであり、特

第3表のc 愛媛県市町村別米生産調整目標数量 (S. 45単位, トン, ha)

市 町 村 名	生産調整 目標数量	同 面 積	市 町 村 名	生産調整 目標数量	同 面 積
松山市	1,655.81	337.7	美濃町	67.20	17.1
宇和島市	569.54	126.8	川谷町	20.03	5.5
新居浜市	67.27	18.0	田前町	54.36	13.5
西条市	36.94	10.1	前田町	467.42	93.3
大洲市	360.61	88.7	山田町	82.72	19.3
川口町	761.75	177.4	川口町	19.85	6.5
喜多町	400.70	105.3	双海町	50.18	14.7
三ツ子町	168.46	41.1	長内町	44.97	12.0
伊予市	131.02	32.2	五長町	50.11	14.9
北条市	366.74	76.5	十崎町	114.34	32.7
新土佐町	348.87	73.0	川内町	65.62	16.2
小幡町	7.04	3.0	内方町	54.21	17.1
丹波町	259.04	65.3	保井町	18.34	6.5
三ツ子町	173.61	40.4	伊予市	17.24	4.7
三ツ子町	569.40	124.8	三ツ子町	4.66	1.5
三ツ子町	343.55	81.1	三ツ子町	22.23	6.2
三ツ子町	166.53	39.6	三ツ子町	2.31	0.7
三ツ子町	128.38	31.6	三ツ子町	536.53	177.8
三ツ子町	134.18	34.4	三ツ子町	214.66	59.2
三ツ子町	35.47	8.4	三ツ子町	162.97	46.2
三ツ子町	64.52	14.5	三ツ子町	24.21	6.3
三ツ子町	62.65	14.2	三ツ子町	244.04	54.7
三ツ子町	46.48	12.1	三ツ子町	267.11	67.9
三ツ子町	12.47	3.3	三ツ子町	128.27	33.9
三ツ子町	19.48	5.2	三ツ子町	22.45	7.5
三ツ子町	7.37	2.2	三ツ子町	177.54	47.9
三ツ子町	21.42	5.8	三ツ子町	5.21	1.6
三ツ子町	27.47	7.5	三ツ子町	77.91	21.8
三ツ子町	334.90	72.6	三ツ子町	72.01	20.1
三ツ子町	259.59	58.4	三ツ子町	103.26	28.4
三ツ子町	242.68	56.5			
三ツ子町	24.10	6.6			
			計	11,000,000	2,570.0

別立法とか食管法の法律改正をするのが当然である。現状の制度では買入れ制限などは、とうてい出来ない条件である。農家が直接自主的に自主流通米にでも回すのであれば、現行法で実施することが出来るが、しかし農家が自主流通米よりも、政府の買上げを望めば、農家の申し立て通りに、買上げを実施せねばならないのである。

私は、これらの考え方とは異なった方法で行なうのが消費者にも喜んでもらえるし、農家もよいと考えられる方法は、米の品質と食味のよい品種を各県別に地域別に選定し、その内の1~2品種で等級別の買上げをする方法である。食味のよい、品質のよい米は病虫害に弱くて収量の少ないものが多い。多収品種で病虫害にも強い品種は食味も悪く品質も劣るものが多いので、品種的に生産調整のみちをひらくことが可能であると考えられ、病虫害防除も残留毒や残留臭の關係から効果的な農薬が減少して防除の徹底は困難な時代にな

りつつある。このように決定品種と等級買上げは食味や品質の点からも消費者に歓迎される商品としての価値ある米と考えられ、自然的な生産調整が実質的に出来るのではなからうかと思われる。

(4) 農業人口の減少は生じてくるか

米を農家はすぐに売るので倉庫などは必要性がない。また置き場所もない状態である。何百万トンの穀を貯蔵する施設はなく、倉庫もないので1週間か10日なり、1時的に置く納屋の如きものはあるが、倉庫でないから1年も2年も保存することは出来ない。1時のがれに貯蔵している程度で恒久対策ではない。米の増産廃止と古米処分を如何にすべきかが重要で根本的な農業形態の改正や農業人口を合理的に減少させて縮小することは大切な問題点である。現在農業就業人口は次第に減る傾向であり、将来も恐らく減り続けるであろう。ただしこれだけでは解決しない、その農業就業人口の減り方よりも農家戸数の経営個体数が減少しないからである。農業就業人口の減少をどのようにして、残った人々のために経営規模の拡大をするために結びつける対策を立てるかが経営上からみた構造の問題点でもあと考えられる。

農家から都市（他産業）に流れる人口が多い

第4表のa 増 加 人 口

調査別		総 数 (a)	社 会 的 異 動							自然異動
			離職転入	勤務者の 転入	家族の 転 入	縁事の 転 入	その他の 転 入	農家の増 加による	小 計	出 生
年次別 実 数	S42年①	16,700	2,400	1,300	1,500	2,500	2,500	600	10,800	5,900
	S43年②	13,400	2,400	1,100	1,200	1,500	1,800	700	8,700	4,700
構 成 比	S42年	100	14	8	9	15	15	4	65	35
	S43年	100	18	8	9	11	14	5	65	35
対前 年増 減数		②－①＝③ △ 3,300	0 △	200 △	300 △	1,000 △	700 △	100 △	2,100 △	1,200 △

第4表のb 減 少 人 口

調査別 年次別		総 数 (b)	社 会 的 異 動							自然的 異 動 死 亡	差引き 純増減 (a) -(b)	
			就職転出	勤務者の 転出	家族の 転 出	縁事の 転 出	その他の 転 出	農家の減 少による	小 計			
実 数 構 成 比	S42年①	30,000	10,200	1,300	800	3,300	6,500	3,300	25,400	4,600	-13,300	
	S43年②	26,700	9,000	1,500	1,100	3,300	3,900	3,400	22,200	4,500	-13,300	
	S42年	100	34	4	3	11	22	11	85	15	—	
	S43年	100	34	6	4	13	15	13	83	17	—	
対前 年増 減数		②-①=③	△ 3,300	△ 1,200	200	300	0	△ 2,600	100	△ 3,200	△ 100	—

〔注〕 単位、人、%、で標示、推計値は100位でラウンドしている。

土地を農家は売りたいから売らないで経営規模を拡大するのであれば、土地を貸すことになるが、自作農主義を建前にしてきた農地法をある程度変えなければできない。農

地法の改正を必要とする点もあるが、農地改革をやってからまもない今日急にまた昔のような考え方を持込むのは、自作農主義を強く主張してきたことについて根本的に否定するわけにはいかない。しかし農地法改正を行なおうとしているが、農家は土地を手放さないの
で経営規模拡大は非常に困難と考えられる。土地を売るのではなくて賃貸で貸しやすい
ようにして奨励すれば、土地問題は解決しやすくなると思われる。自分の自由意思や好きで農
業をやめる人には仕方がないと考えていたが、離農する人を優遇するために年金を出したり、
社会保障で年金を支給している時にはその割増をしたり、一時金を出したりすること
を奨励すれば効果的である。さらに職業訓練や就職のあっせん等で積極的に離農援助と云
う奨励態勢をととのえて行くことである。日本でも当然このみちを進むことによって農業
構造改善事業を発展さして行けるので、その方向に対する施策が立遅れている感じがする。

(5) 急速に発達した機械化による省力

最近急速に農機具の発達をしたので、昔は1～2ヘクタールの栽培が一戸当たりで限度と
されていたが、現在は4～5ヘクタールを一世帯で耕作することが出来るようになった。
特に最近では動力刈取機や田植機などが実用的となり、5ヘクタール以上の大きなものがで
きるようになり、現在の八郎潟では10ヘクタールの単位にまでなっている。農業機械化研
究所も出来ているが、急に技術の進歩発達によって高度化された機械装備で実用化がはか
られたので大きく影響している。その直播機や田植機や苗播機など最近急に改良されて進

第5表 昭和43年度産米生産費と収入 (単位=円, %)

調査 区分	種苗費	肥料費	諸材料費	水利費	防除費	建物費	農具費	畜力費
全 国	529	4,608	1,581	1,370	983	1,188	6,070	116
愛 媛	479	4,745	1,272	1,939	1,695	1,469	7,338	—
対 比	90.5	103.0	80.5	141.5	172.4	123.7	120.9	—

調査 区分	労働費	賃料々金	費用合計	副産物	第1次生産費 (副産物差引)	資本金子	地 代	第2次 生産費
全 国	21,007	1,083	38,535	2,460	36,075	2,007	6,460	44,542
愛 媛	24,897	989	44,823	4,435	40,388	2,389	4,818	47,595
対 比	118.5	913	116.3	180.3	112.0	119.0	74.6	106.9

調査 区分	1戸 当たり 作付面積	10アール当り 主 産 物		10アール当り労働時間			動力運 転時間	畜 役 時 間	家族労働報酬	
		収 量	価 額	家 族	雇 用	計			10アール 当り	1日当り
全 国	98.9	kg 497	円 67,213	時 117.8	時 14.9	時 132.7	時 18.1	時 0.4	円 41,138	円 2,794
愛 媛	61.6	505	67,698	136.7	15.6	152.3	14.4	—	42,267	2,474
対 比△	37.3	8	485	18.9	0.7	19.6△	3.7△	△ 0.4	1129△	420

〔注〕 愛媛県と全国平均(10アール当たり)

んできました。コンバインの刈取機にしても、またバインダーの改良にしても急速に実用化されてきた。これらの機械化によって米作りの労働力におけるピークを切りくずすことに役立ち、田植時期と収穫時期が最も大きな自家労働力の必要な時期で、耕運機についても作業の簡易化による進歩はハンドトラクターの如き動力耕運機の導入は技術の進歩であり、非常に急速な発達で機械化が始まり、脱穀機の改良など動力化は全般の作業にわたって機械化が進み、特に段階的な機械化の手段が急速にのびて全面的な機械化が実現されてきた。土地所有の関係さえ解決出来れば経営の規模拡大は技術的に可能となってきた。技術的に経営規模拡大による労働的な省力化の機械化要素がそろってきたので、米作りも曲がり角にきていると考えるのは個人所得の増加をはかることが将来の理想的な米作りになる。これには5ヘクタールが必要である。今後は米価の値上がりもないと思われるので、規模拡大以外に相対的な値下げでもあれば、経営困難となってくる。

なお現在 800万トンの古米過剰をいかにして防止するか、この生産調整の方法こそ大切で至急に決定し実施せねば、農家も困るから、田植前に米転を考えて具体策を図っておくことが重要である。

(6) 米作省力化の新技术として前進する方向

総合農政の時代となり、米はこれから減反の方向は必至であろうと考えられる。米価も下手をすれば据置き状態のままとなり、自主流通米は暫時増加の傾向になって、いつとはなしに、米はなしくずしの間接統制に移行されてゆくの当然である。有利な作物のある地方では農家は米転（米の作付転換）を必要とする者もいるが、米の増産の方向に道をえらぶべきで決して後退すべきではないと考えられる。最近では農業労働力の急激な減少、米の生産費の低下や経営規模拡大化などをおこない考えて米作の省力化、機械化は重要な意義をもつものである。米の生産過剰は今までの農業構造に大きな変革を迫られているので水田の野菜作や果樹作及び飼料作などに作目を転換したり、また山間地の水田は草地や桑畑に転作するなどを予想するので労力投入的にも、今後一層、米作りは基盤整備をすると同時に機械化、省力化に重点をおいて推進しておくことが最も大切であると考えられる。米の様に高い農産物価格を夢みることは今後ありえないと思われる。このことは農業人口の低下と貿易の自由化が強く要請されているから関税の障壁も適正でない高い税率をかけることは出来ないと考えられる。米の生産過剰に対処するため食管会計の面から1割の作付減反を通報し、米転作休または放棄計画をしている。この複雑な要因を考えて、食管を絶対条件とする米作の在り方を考えることに何か割り切れない点がある。将来各国で立地条件に適した農業が行なわれ、なお日本でも地域ごとに地域性を生かした農業をして自由な交易を行ない、安くて優秀な品物を互いに供給することになるシステムを考えられるので、日本では、どんな型の農業が定着するか、その作目には古い歴史と高度の技術を確立して高い収穫を上げている最もモンスーン地帯に好適した米作りの評価を決して低く考えてはならない。米の国内需要を超過した余剰米は輸出を目標とし、日本人向の品種を普及したり、外人向の安い生産性が高い国際価格水準なみの米作りを積極的に推進すべきである。この米の特定量までは保証価格制度を行ない、規定量の超過生産は国際市場価格で販売する制度で、これによる農家は総合結果により全販売量をプール計算すると保証価格よりも5～10%、安い勘定の受取り程度とする。

第6表 米作りの作業労力推移状況

米作り労力配分作業名	昭和33年度(A) 時 間	昭和42年度(B) 時 間	B/A %
種子準備～育 苗	9.9	7.7	78
本田耕起～代 か き	26.5	18.4	69
田 植	26.3	23.9	91
水管理, 追肥, 防除	24.5	18.4	75
除 草	31.0	17.0	55
刈 取 り, 乾 燥	39.1	34.0	87
脱 穀, 籾 乾 燥	20.0	14.8	74
籾 す り	6.0	4.5	75
全 体	183.3	138.7	76

低い農業所得を維持するため今後は経営規模の拡大をする以外には何もない。財産化された農地の地価は暴騰し、所有権の移動は益々困難性をきわめている。兼業農家の増加と農業労働力の流出により、請負い耕作や集団栽培の発展的な傾向に進みつつあることは見逃せない。なお高度経済成長の発展にともなって経営の規模は拡大されるも、土地所有権の移動はないので農地法改正や農民年金制度を考えて行かねばなるまい。このような米作りの省力化と生産性向上の必要は益々今後強まる可能性が存する。省力技術化の第1は直播栽培から始まる。これには経営規模拡大により、構造改善事業で農道、ほ場、水管理上の灌排水を完全に基盤整備してから進展をすればよい。除草剤はDCPA剤（スタム）かスエップ水和剤を使い続いてサタンS剤かM剤を浸水して使用すればよい、なおスエップ水和剤を播種期と2葉期に使用して浸水後にサタンS剤を散粒してもよい。農業については新しい水中施用粒剤、粉剤、乳剤、水和剤等が続出し防除効果をあげているので将来は必ず直播栽培を見なおす時代が来ると考えられる。省力技術化の第2は苗播栽培である。この機械化移植は急速に普及の伸び率を示し、これらは人力用と動力用の土付苗の移植機である。苗は箱育苗式、苗紐式、散播式があつて欠株も甚だしく減少した。冠水によって稚苗移植の被害も甚だしく残ることもあるが、漸次改良せられるであろう。省力技術化の第3は田植機で経営規模の拡大にともなって限界もあるが歩行型から乗用型に移行すると考えられ、労力的な調整面から直播と移植はどちらも併存すると思われる。生育中における管理上の省力化は効率的な施肥料や病虫害防除の農薬と除草効果の高い散布施用機械の開発が大切である。なお農薬による省力化の時代がきている。動力散粒機か手動散粒機または手播きにしても極めて作業能率が早くて効果的である農薬は土中のコロイドと結びつき残効性もながくて長期間有効であるから防除回数は少なくてもよい、しかも幅広い適用をもっていて重要病虫害のいもち病、もみがれ病、白葉枯病、穂枯れ、ニカメイチュウ、ウンカ類、ヨコバイ類等に効果的であり、さらに残留毒性の心配がいらない、極めて低い毒性の農薬であるが施用の方法や時期によりて、作物の体質を変えて増収の道を開き、病虫害には抵抗性品種の如き体内形質の作用をはたらくので長期間有効である。このような新農薬にはキタジンP剤（IBP剤）が開発されている。将来多数開発されれば一層省力化を期待することができる。

なお米作りの省力化で急転回した収穫調整であるが、刈倒し集束結束型の収穫機として

バインダーやコンバインが経営規模拡大にともなう重要な役目をはたして急速に普及しつつある。さらにカントリーエレベーターによるライスセンターが設置された地方が次第に多くなってきた。

古今における省力化の差異について昭和33年度と昭和42年度の9年間における分野では除草剤の普及効果と高性能の耕うん機やトラクターによる本田の耕起と代かきについて省力化をした。なお水管理、施肥、病虫害防除、脱穀、モミ乾燥、モミすり等の省力化が新しい機械化によって研究され普及したことが多い。さらに現在は田植の方法と、刈取り乾燥の省力化がのこされており機械化されつつある。

米作りの省力化と将来への方向について先づ育苗方法と田植方法である。田植機は10数年前より基礎的研究が行なわれ、箱育苗の土付苗を使用した機械が開発され、技術が進展して昭和40年頃から急に研究され改良も進み昭和43年には普及にうつされ、昭和44年度は数万台に達し、共同で大型育苗施設も考えられ急増した機械化田植方式の実現となった。しかし将来は小面積の中山間部に発展し、大面積の平坦部では一時的に田植機が使用されるが、次第に直播栽培の方向にかたむくものと考えられる。

収穫機械については外国の如き大型のものは適さず、日本むきの小、中型のバインダーや自脱コンバインの改良開発された実用機の普及は農家労力の急激な減少と機械化の成長があいまって急速な増大を予想する。中山間部の小面積にバインダーが、平坦部の大面積では自脱コンバインが、急速に普及され省力化は乾燥機の普及とともに能率化しつつある。

平坦地の大面積は直播栽培の研究が重要で農家の労力不足と経営規模拡大に作目の転換など多くの変革に対処せねばならない。古くから麦間直播が行なわれたが技術的な近代化をはかり、浸種して水から引上げ、1日おいて発芽直前に播種すれば、発芽揃いをして将来有望な省力多収技術になり大きな期待をもつことの出来る直播栽培が可能である。数万ヘクタールの直播は乾田直播がほとんどで全面全層播乾田直播や全面全層播乾田直播及び不耕起乾田直播など将来益々省力化した不耕起か簡易耕うん機による乾田直播栽培の技術体系が確立され省力安定多収技術として普及されつつある。なお耕うん機や播種機による乾田直播栽培とコンバインや共同乾燥施設を利用して自然条件に適合した経営規模拡大は当然、省力安定多収技術体系となって平坦部の米作り本法の基礎となる。なお一般農家は機械移植技術体系を中山間部で進展せしめ省力化が急速にすすんでいる。

私は米の食味をよくし品質向上と経済的な目的で、現在とりのこされ、今後の研究を必要とするものについて最近4年間でこんな新しい研究に成功をした。

これは農薬の粒剤を水中に施用し、根から吸収せしめて、いもち病の省力防除対策に役立てることを始めて認めた。さらにこの薬剤は分けつを多くし多肥高位収獲の条件下に好適し、ウンカ類に有効でもあるから萎縮病や縞葉枯病などの防除対策に効果的であり、なお節間が短かく草丈も短くなるので倒伏防止対策には驚くほどに有効である。特に良質多収で食味のよい品種の体質形成の変化によって機械化にも適応性を持たすほどの結果が実験で認められ、イネの体内細胞は硬化し珪化細胞が増加しむろん珪酸も分析では標準よりも増加を認められ、葉の表皮細胞にある乳頭突起や気孔数が甚だしく多くなり、節間も短かく、草丈も短かく、根の発育は極めて旺盛で繁茂し標準と比較して甚だ多い、分けつが多くなり増収の基礎作りとなるが穂肥が早や目に切れやすく出穂も1～2日は遅れる。

農薬による残留毒や残臭の心配は全くない、散布上の省力化については散粒機でも手播

でも極めて簡単で早く作業が終る。病虫害に弱い品種でも食味がよくて品質が優れておれば、この薬剤を使用して多収を収めることが出来る時代が来たのである。この農薬はグミアイ化学工業株式会社が開発した、IBP 粒剤（キタジン P 粒剤）で各農協に販売している。なお除草対策では、スタームの変りにスエップ水和剤が使用され、なお PCP 剤や M O 水和剤、ニップ水和剤等の変りにサターン S 剤及び M 剤を使用すれば、防除面とも連続をとって効果をあげることが出来る。

さらに短期イネ品種を育成し栽培法の究明と作季による自由度を高めることを考えている。このような多くの技術的な結集によりて省力化をはかり、高度経済成長下における、米の生産調整上からみた食味と米質向を新技術によって、はかることが急務である。

摘 要

- 1 日本農業は、まがり角に立たされているので総合農政によって解決をはかろうと考えている。
- 2 米の不足時代から輸出農産物としての時代と農地法による変革と農業経営の問題点について規模拡大を考えている。
- 3 米の生産調整は農業構造改善に連がり食糧法の法律改正を必要とするようになってきた。
- 4 農業人口は次第に減少の道をたどり、さらに将来、益々人口は少なくなると予想されるので規模拡大と機械化による省力化をはからねばならない。
- 5 急速に近年発達改良された農機具の機械化は田植機の改良と収穫期の機械開発等により、大きく変革し農作業の省力化が規模拡大を可能とし発展の道をきりひらいた。
- 6 米作りの省力化について機械化は勿論のこと基盤整備と経営の合理化による規模拡大によって一層の省力化と品質向上を目標として農薬による植物体内組織の体質改善をはかることは当然のことで、生産性を高め国際市場で打勝てる新しい技術を開発拡大して行くことに希望を持つべきである。

参 考 文 献

1. 田辺 勝正：現代食糧政策史（1948）
2. 平野 常治：経済生活の発達（1949）
3. 本位田祥男：われわれの生活と経済学（1951）
4. P. ブリテン（西野人徳訳）：世界の食糧問題，上，下（1954）
5. T. シュルツ（川野，馬場訳）：農業の経済組織（1958）
6. 中山 誠記：食生活はどうなるか（1960）
7. 谷 達雄：食糧の生産と消費（1963）
8. 須田久一郎：食糧経済（1964）
9. 渡辺 実：日本食生活史（1964）
10. 中山 誠記：食糧の経済学（1964）
11. 森 雅央：食品の商品学（1964）
12. 大河内由美：日本の食文化小史，女子栄養大学出版部（1964）

13. 青木 英夫, 大塚 力: 食生活史, 至文堂 (1964)
14. 東畑 精一: 日本農業年鑑 (食糧経済) (1965~1969年)
15. 下田 吉人: 日本人の食生活史 (1965)
16. 鈴木 直二: 米穀流通組織の研究 (1965)
17. 大河内一男: 食糧, (東京大学出版会) (1966)
18. 守田 志郎: 米の百年 (1966)
19. 平野 赳: これからの食品流通コールドチェーンの解明 (1967)
20. 露木 英男: 食物の歴史 (1967)
21. 鈴木 直二: 産米改良の歴史と現況, (市場から見た米の品質) (1967)
22. 真木 胖, 橋田 信行: 低毒性有機磷殺菌剤による水稻病虫害防除の水中施用法に関する新技術の研究 第1報 (愛媛農試病虫科) (1966~1967)
23. 真木 胖, 橋田 信行: キタジン乳剤の水面施用効果試験について, (農薬通信, 第71号) (1967)
24. 松下 英夫, 花村 豊満: 食糧経済学, (1968)
25. 桜井 芳人: 食糧政策, (日本における食糧消費の諸問題), (1968)
26. 真木 胖, 橋田 信行, 重松 喜昭: 低毒性有機磷殺菌剤による水稻病虫害防除の水中施用法に関する新技術の研究, 第II報, (愛媛農試, 病虫科) (1968)
27. 小野 誠志: 食糧経済 (1969)
28. 食糧庁出版: 食糧管理月報, (雑誌) (1969)
29. 愛媛農林統計協会: 統計調査からみた愛媛の農林水産業 (1969)
30. 木村 靖二: 食糧経済学 (日本農業新聞) (1969)
31. 日本農村調査会: 農林省年報 (1969)
32. 真木 胖, 橋田 信行, 重松 喜昭, 高橋 晋, 河野 弘, 上森 実: E B P, I B P 剤の水中施用が稲体の生育, 形態に及ぼす影響, (四国植物防疫研究, 第4号), (1969)
33. 真木 胖, 橋田 信行, 重松 喜昭: 農薬 (低毒性有機リン殺菌剤) の水中施用法とその効果 (農業および園芸, 第44巻, 第11号, 1673 P) (1969)
34. 真木 胖: I B P 剤 (殺菌剤) 水中施用の驚き (現代農業, 2月号, 52 p) (1970)
35. 宇都宮 公: 愛媛県農林水産だより (第93号) (1970)

(昭和45年3月31日受付)

西ノ岡焼の研究(下)

永田政章

今治明德短期大学

A Study of the Stonewares, Earthenwares, and Porcelains
that were matured in "NISHINOOKA KILN"
at Shigenobu-cho, Onsen-gun, Ehime Pref.

Part 2

Masaaki NAGATA

Imabari Meitoku Junior College

第五章 窯と原料土

窯は原型が全部こわされているので、復原の方法もないが、窯の底辺部や、窯壁の両側の土が熱の為に赤くただれている部分などがそのまま発見されたので、窯の位置、方向、規模の大体は推定出来た。

古老の証言にしたがえば、西ノ岡登窯は巾八尺程で四棟(四室?)三基が並列して設けてあり、焚き口はいずれも東向きであった。窯の残構(天井も)は明治末年まであったという。窯の側に作業場があって、明治34・5年頃まで残っていた。窯道具のトンバリやハマなどが子供のおもちゃに使われていたという。

西ノ岡窯最後の陶工であった、通称「半胴熊さん」こと、故倉瀬熊次郎氏の話では、重信町大尺寺部落の「赤池の土」と「山の神の土」(註14)(地図のA地点)とを混合して原土を造った。又窯の下も手の「中池」や「若衆池」(地図のB地点南側の三つの池のうち東の小さい池と中の池)の底に沈澱した粘土も混用したそうである。水簸(スイヒ)に使う水は窯に近く、今も適度に流れている。磁器用原石をやわらげ「つちもの」に適する原土をつくるのに粘土が混ぜられたものであろう。このあたり中央構造線(註15)に近く、粗面岩質安山岩や黒雲母安山岩の露出している地帯である。

第六章 ま と め

一 窯の活動期

まず天保二年(1831)記年花立てを第一の手がかりとすると、これが技術的に完成するまでには、開窯後一年や二年ではむずかしい。ただし、他地方の熟練工が多数移住して来て、一時に大規模な築窯をした上で、操業を開始したとすれば別に窯の成長期間を考える必要はないのであるが、そうした推定の出来る根拠はどこにもない。それよりもむしろ、全国の陶窯が急速に発達していった当時において、熟練工は各藩奪い合いの状態であり、いかに親藩松山十五万石の威をもってしても、そう一時に多数の熟練工は得られなかったと考える方が妥当のようである。そうすれば、どうひかえ目に算定しても、1831年より数年前文政八年(1825)頃を開窯創業期とみても、隣接諸窯との比較において決して早すぎはしないと思われる。この事は陶工和田升太郎の父なる人の年令(註16)を推定してみても、大体合致する。

前述倉瀬熊次郎談を総合して、西ノ岡窯は旧松山領内諸窯のうちでは最も遅くまで操業を続けていた。つまり需要があり収支つづなっていたとみてよく、おそらく明治三十年(升太郎63才-1897)頃を終末期とするのが正しかろう。したがって西ノ岡窯活動期間は約七十年間となる。(註17)

二 焼成品目の多いこと

現在までに調査されている愛媛県内のどの窯よりも焼成品種目が多種多様である。江戸後半期から明治に入る期間に、昔から用いられていた木地屋製の椀や木皿は(高級品は別として)日常生活から次第にその量を減じてゆき、これに代って、新興産業である窯業製品の陶磁器が急速に庶民の日常生活の中に実用化され、普及していった。伊予各藩も全国のこうした趨勢におくれまいと努力した事は無論である。陶磁器は茶の世界のぜいたく品から一挙に日用品化していった。

西ノ岡焼はそうした日用雑器類のうち、大は甕や壺から、小は盃にいたるまで、ほとんど全ての必需品を供給することが出来たようである。今日われわれが想像する以上に西ノ岡製品は普及していたであろう。ただし日用雑器の運命として、消耗品扱いの末、後世に伝えられるものはほとんど無かったであろう。なお此の窯では器物の機能面をふくめて、可能な限りの製陶技術を発揮して、庶民日常生活のつましやかなうちにも、豊かな美とうるおいを添加していった工夫の跡のみられることは注目に値する。現代にいう「民芸窯」の典型的性格を具備したユニークな窯であった。

さらに特記すべきは、藩政時代から「予州松山」在印の優品をつくり上げて松山藩御用窯としての役割りを併せ果たしていたことである。

三 北九州諸窯との関係

主として今後の研究にまたねば明らかにならないが、トビカンナ技法の伝習、銅系青緑釉の頻繁な使用と発色の成功から判断して上野、高取、小鹿田窯との様式系列上の密接な関係を否定することは出来まい。

四 土佐尾土焼との関係

灰釉口縁部鉄釉がけかんぴん、灰釉鉄絵又は墨絵かんぴん、同じく徳利で貫入のある、やや黄味がかった軟かい感じの陶器は従来ほとんど「尾土焼」の名で取り扱われ、一部は大

洲「築瀬焼」ともされていた。写真に示しているかんぴん類もその例にもれなかった。これらの伝世品の相当数が「西ノ岡焼」に窯籍を改めなければならなくなった。この事は何よりも出土陶片が証明してくれている。

五 北川毛古窯との関係

白泥化粧がけ、失透ワラ灰釉大小徳利（時には焰が還元して青磁がかり、青味をおびている）が西ノ岡で多量に製産されていた事実が明らかとなった今、「砥部北川毛窯」として断定的に取り扱われてきた伝世品の相当数を西ノ岡窯の本籍に帰さねばならなくなった。

六 東野焼瀬戸助窯との関係

予州松山楷書印押捺、同じく手書きサイン入り陶片の出土によって、従来伝承的東野焼瀬戸助作とせられていた伝世品のうち、少くとも以下に記す諸作はこれを西ノ岡窯焼成とする方が正しいようである。

かつて「瀬戸助の謎」として著者の提出した疑問のうち、予州松山在銘品の一部が西ノ岡の系列に入るべきことが明かとなり、謎の一端はほぐれて来た。これは今回西ノ岡窯調査の最大の収穫といってもよい。（註18）

下記の伝世品はいずれも優品であるが、いわゆる瀬戸助焼から西ノ岡焼成へ窯籍を変更したい。サインの文字まで西ノ岡出土陶片とそっくりであるから。

(1) 予州松山手書きサイン入り香炉（P53）

これには姉妹品があるが、それをも含めて。灰釉古瀬戸風。サインはないけれど、P. 26, 出土陶片の香炉も全く同型同質である。

(2) 伊羅保風灰釉皿（P54）

予州松山手書きサイン入り。

(3) 乳白濁釉流しがけ壺（P55）

合鉄灰釉を下地とし二重がけしてある。予州松山在印。

(4) タンパン釉流しがけズン胴花入れ。

「松山」とサインあり。

(5) 灰釉青磁色大型水滴（P56）

李朝系様式、「予州松山」サイン入り。

(6) 灰釉厚がけ壺（P57）

マット釉化して、落ちついた艶消しの暗い鶯色を呈している。「予州松山」在印。

七 残された問題

(1) 大規模な登窯で数十年、大量生産を続けた西ノ岡窯を支えてきた背後の力、生産経済的基盤はどこにあったか。その鍵は誰が握っていたのであろうか。和田家個人経営であったとは考えられない。部落有力者の共同出資とみてもまだ荷が重すぎる。予州松山印などから判断して、松山の豪商とか、久米郡代官など藩政に直結する有力な後援者があったと想像される。松瀬川焼、川根焼等に同様の例証もある。西ノ岡地区を督する久米郡代官を二期つとめた奥平貞幹は明治になってから殖産振興功労賞をもらった人だけに、この窯の振興に関係ありと想像することは出来るが、少なくとも創業には関与していない。今後

の研究にまつ。(註19)

(2) 相当数、少なくとも十人以上の陶工が定着し又流動したと考えられるが、(註20) そうした技術労働力の供給ルートはどこであったか。これをむやみに砥部窯群に結びつける事は出来ない。文書、記録の発見によって、窯主、陶工の氏名、出自を順次明らかにしてゆかなければならない。

(3) 前二項の解明をまわって、窯の系統がおのずから確認されてくるであろう。いずれにしても北九州、山陰諸窯との関連は製品の様式上の関係から否定出来まいと思う。

(注1) 愛媛の文化第5号「伊予の陶芸(5)松瀬川焼研究其の2」(永田)資料12及び13。

資料 12

世界陶磁全集年表および日本陶磁協会雑誌「陶説」74号

磯野風船子編、日本陶磁年表によれば、弘化元年(1844)から嘉永7年(1854)までの10年間に全国で48ヶ所の著名な新窯が開かれている。新窯ブームの起った時代である。無名の陶窯はもっと多数に出来ていたであろうし、新窯の正確な基数はわからないが、おそらくこの間に百基以上は新設されたと考えられる。

資料 13

江戸時代における全国陶窯数。

小山富士夫著「日本の陶磁」江戸時代日本諸窯略図説明によると257ヶ所。但し全く概数である。伊予関係だけを見ても砥部焼は1ヶ所きりとなっており、郡中十錦が出ていて三島窯が落ち、五郎焼があつて梁瀬焼が出ていない。則之内、松瀬川、伊予久谷などは全く出ていない。これから推してみてもこの数字は実数をうんと下回っていると思う。

世界陶磁全集4、5、6巻によれば、江戸時代陶窯数は地方別に次のようになる。

北海道1。奥羽31。関東6。江戸10。北陸24。中部29。近畿51。中国48。四国16。九州はさすがに多く、唐津周辺初期の窯104を含めて334ヶ所。全国合計550ヶ所となっているが、この数字にも無名の窯がもれているし、伊予の部では、やはり前掲諸窯が載っていない。

(注2) 愛媛の文化創刊号「伊予の陶芸(1)」において詳しく紹介している。

(注3) 同前注7に紹介。

(注4) 2つ以上の呼称をもつ窯の例は多い。伊予でも、東野焼は瀬戸助焼とも松山御庭焼とも云い、郡中三島焼は市場焼、御荘焼は古く菊川焼とも長月焼ともよばれていた。又丹原町川根焼は御陣屋焼、田滝焼、古田焼、高知焼の異名をもつ。西宇和郡保内町の宮内焼にも枇杷谷焼の異名がある等々。

(注5) 愛媛新聞1969年4月13日(日曜日)号永田稿「四季録」参照。

(注6) 上浮穴郡上黒岩洞窟遺跡以来の縄文早期押型文土器にすでにあらわれ、今日に及んでいる単純な幾何文様で、衣食住の生活装飾に現代もさかんに使用されている。

(注7) これも石器時代以来のポピュラーな文様である。

(注8) 周桑郡川根焼の大形磁器染付け文様として出土例がある。

(注9) 上に同じ。砥部かんばら窯からも出土。

(注10) 椿(P35)の文様であるが、天然コバルトで大井の内側に絵付けしている。他に、伊予久谷窯茶碗、砥部かんばら窯などに頻りに利用されている。)竹(北川毛古窯をはじめとして、伊予久谷窯や則之内窯でもさかんに使っている。)松林文(伊予久谷、川根窯

で使っている。) 走る馬(どの窯でも初窯の祝として、縁起に馬の絵付けをした。砥部かんばら窯でも同様陶片を発見。)

- (注11) 釉薬の化学的成分については一部、愛媛県立砥部窯業試験場長の指導助言をうけた。
(注12) 1200ccから 100ccの間の発色。
(注13) 愛媛県産陶石元素分析表(愛媛大学教育学部永井浩三教授提供) その他参考文献より判断して、白色粒子は良質の高野川(伊予郡双海町)陶石を使用したものとする。
(注14) 「山の神」の現場は窯址から上る背後の山頂で、原石(参考文献11, 13, 14によれば粗面岩質安山岩か黒雲母安山岩の崩壊過程における露頭)を運びおろすには好適の場所。運搬には材木を運ぶ時のソリ(猿轡サルモッコ)を使用。
(注15) 参考文献12, 13, 14, 参照
(注16) 陶工和田家は明治5年(1872)

壬申戸籍によれば左の通り

伊予国久米郡西岡村20番戸

甲組 129番地之内2番屋敷

前戸主 和田幸之右衛門

戸主長男 和田升太郎

天保5年3月19日生壬申年39才

新居郡宇高村農高坂百松長女

妻 紺ン(注コン)

天保4年5月15日生40才(1833)

次男 徳太郎

安政4年8月28日生16才(1862)

長女 久

慶応3年2月10日生6才(1867)

三男 虎吉

明治3年正月8日生3才(1870)

四男 寛次

明治5年7月12日生当才

上によると、西園寺文書位牌写しに添えた解説は一部訂正されなければならない。升太郎父は「枳五郎」でなく幸之右衛門となる。西園寺文書にいう「升太郎父枳五郎」は幸之右衛門の別名であろうか(明治改名の例多数あり)。とすれば歿年月日が「天保3年11月25日」では、升太郎の生年月日天保5年3月19日より14ヶ月も前となり、升太郎は幸之衛門(位牌の枳五郎)の子でなくなる。位牌、戸籍双方正しいとすれば「鏡山浄雲信士」は升太郎の何にあたるか。疑問として止めたい。

- (注17) 重信中学郷土研究グループの調査では、「明治初年?の大西家蔵野取図で、西ノ岡カラツ山は宅地となっているが、明治33年(1900)耕地整理地図(役場所蔵)では畑と水田」になっている。窯も作業場もすたれていたからであろう。
(注18) 伝説から出発した曾我部松亭氏「陶工瀬戸助の研究」では松山焼即松山御庭焼、即予州松山銘、即東野焼、即瀬戸助作と断定、全部一つの窯の出であるとして、これを無条件肯定した上で立論している。証拠はなにもなかった。(伊予の陶芸(2)拙論にて紹介)
(注19) 奥平貞幹がはじめて久米郡代官見習になったのは天保11年(1840)22才である。
(注20) 旧松山領「伊予久谷窯」は著者の研究で明かになった陶工名だけでも30人を越す。(参考文献22)

(附 録)

西岡からつ山窯製品発掘調査計画(重信町教育委員会文書)

趣旨——西岡焼の起源・手法・製品種類等を調査し、文化遺産を正しく理解し、もって保存愛護の資とする。

発掘調査場所——西岡土地改良区の所有する右図の地点(図略)

調査者——重信町教育委員会

調査指導者——。永田政章(今治明德短大教授 前県立図書館長)

調査委員長——。和田教育長

調査委員——。森正史・武智貞義・武智成彬・伊賀護・八木茂・野首恒明

協力団体——西岡区・西岡土地改良区・重信中学郷土研究クラブ

発掘調査方法 (1) 昭和43年7月25日 発掘場所の草刈り
(2) 8月3日 測量及び指導者による調査
(3) 8月5日 発掘(記録・撮影・出土物整理) 重信中学郷土研究クラブ・地元の出夫者
(4) 8月6日 登窯測量作業

参加者——重信中学 神山友也・重中郷土研究クラブ20名 篠木四郎

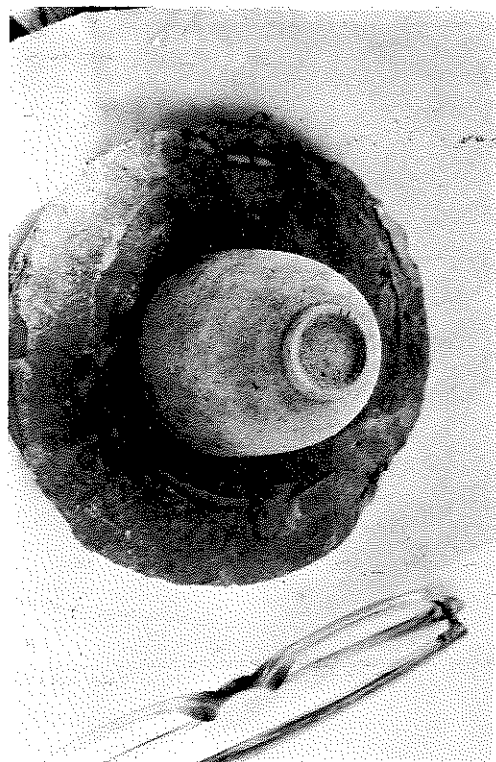
地元人夫——大西政徳・大西静枝・鎌田 巧 (和田浅吉・和田要)(陶工子孫) 大熊章

参 考 文 献

1. 伊予古美術大観 昭和2年刊 愛媛県立図書館蔵。
2. 西園寺富水文庫 覚え書「伊予の陶器」下巻, 松山商科大学図書館蔵。
3. 陶器講座 第24巻 雄山閣 昭和13年刊。
4. 世界陶磁全集 江戸時代上, 中, 下, 河出書房 昭和32年刊。
5. 日本の陶磁 小山富士夫著 中央公論美術出版刊, 昭和37年。
6. 愛媛の文化 創刊号, 2, 3, 5号 愛媛県文化財保護協会刊「伊予の陶芸」永田稿。
7. 明治5年壬申戸籍簿 重信町役場蔵, 西ノ岡村分。
8. 陶匠瀬戸助研究 曾我部一郎著, 伊予史談第81号抜刷り。
9. 奥平貞幹年譜 三宅千代二, 伊予史談 第147号。
10. 明治39年記録, 岡八幡社建築寄附米領収帳, 会所係り和田卯太郎記。
11. 愛媛県内陶石元素分析表。
12. 愛媛県の陶石分布図。
以上2点愛媛大学永井浩三教授より提供を受く。
13. 砥部町附近の第三紀層 永井浩三, 堀越知衛共著 愛媛大学紀要 第Ⅱ部 第1巻第4号。
14. 石鎚山の第3系と鉱床 永井・堀越・宮久共著, 1962年, 日本地質学会第69年会準備委員会刊。
15. 化石・鉱物・岩石標本目録, 大野地学資料研究室。
16. 昭和37年8月4日, 愛媛新聞。「上黒岩に関する座談会記事」
17. 伊予史談 第164・165合併号。「愛媛県上黒岩縄文遺跡第1次調査略報」西田栄。
18. 日本洞穴遺跡 日本考古学協会編 平凡社刊, 四国地方の洞穴遺跡。
19. 愛媛県下の縄文土器についての一試論。西田栄, 愛媛大学紀要第一部人文科学6の2。
20. 陶磁器 宮川愛太郎著 共立出版KK刊。
21. 陶磁器「釉薬」同上。
22. 伊予久谷焼概説 永田政章 松山市「久谷村誌」
23. 砥部焼の歴史 砥部町教委刊 永田稿「砥部焼の周辺をさぐる」
24. 研究集録 (1)重信中学校郷土研究グループ

附記 此の研究に協力していただいた次の方々には深甚の感謝をささげる。(順序不同)

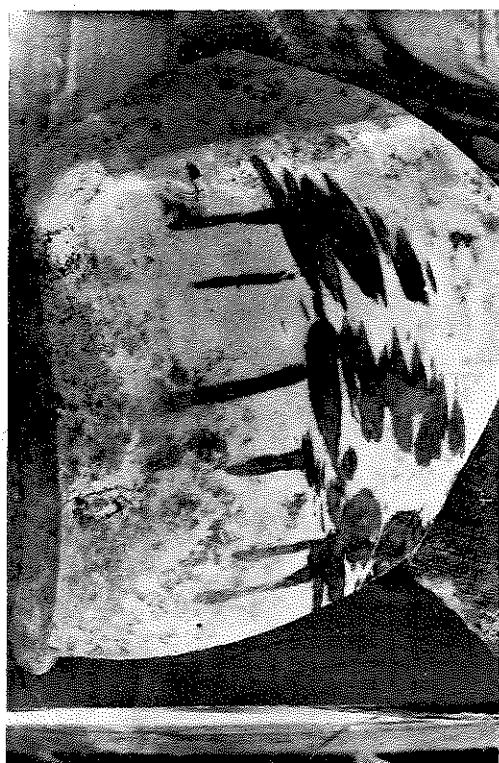
故佐々木長治氏, 宮脇先氏, 井部栄治氏, 柳原多美雄氏, 愛媛大学永井浩三教授, 前愛媛県窯業試験場長松本信明氏。
重信町教育委員会教育長和田三郎氏, 同中央公民館主事大西政徳氏。森正史氏, 武智貞義氏, 武智成彬氏, 伊賀護氏。重信中学校郷土研究クラブ指導者, 野首, 神山(予州松山サイン発見者)篠木諸教諭。及び同グループ生徒諸君。地元側大西静枝, 鎌田巧, 大熊章諸氏。陶工和田家後継者和田浅吉, 和田要両氏。



31



32



33



34



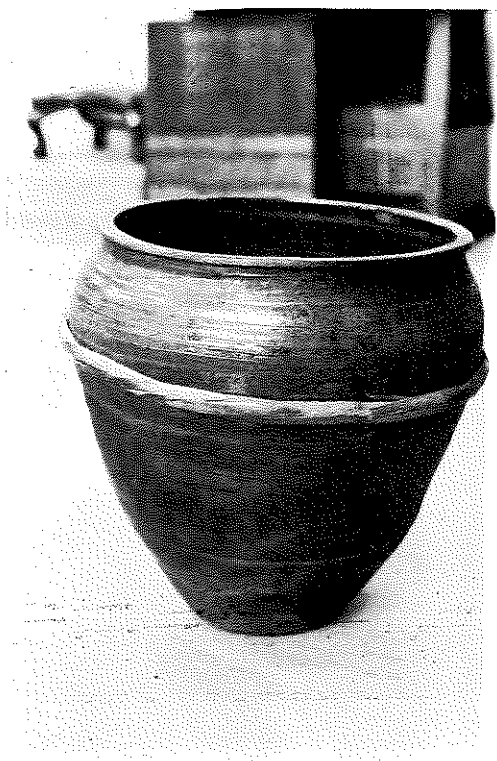
36



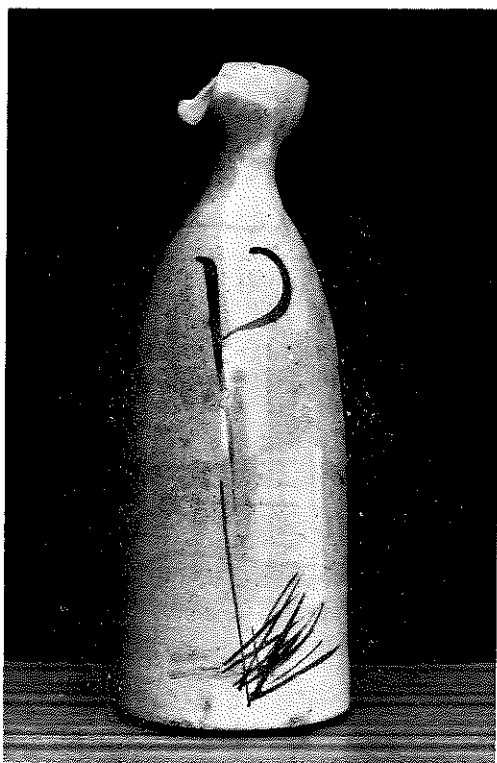
37



38



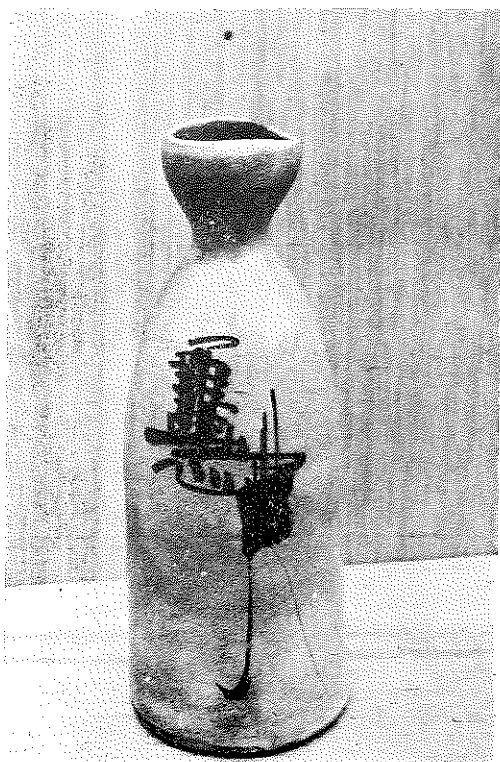
40



41



42



43



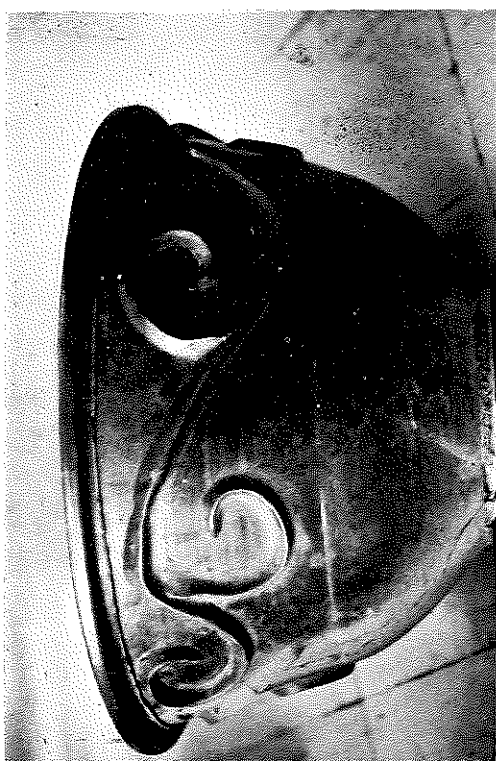
44



35



39



45



46



47



48



52



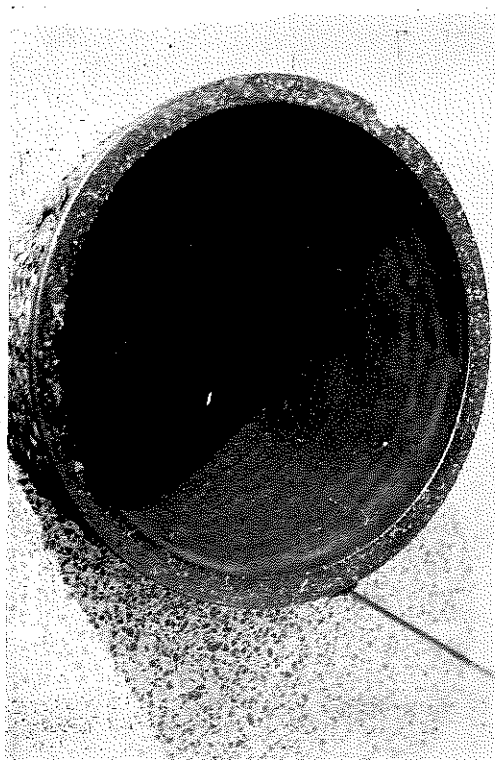
56



49



50



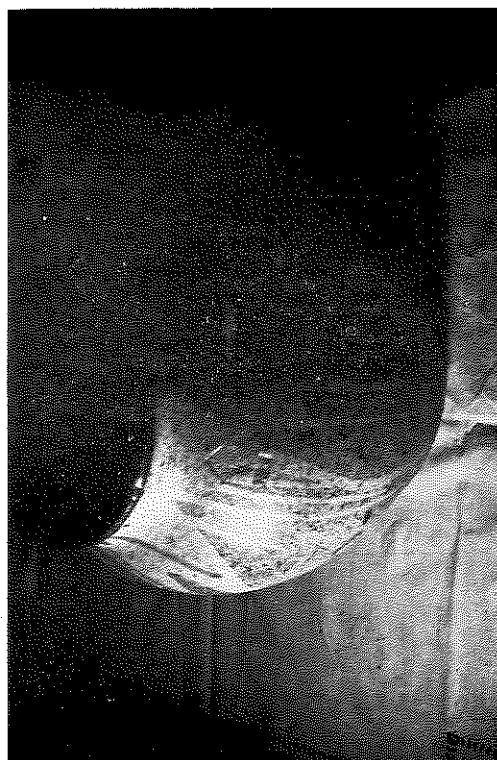
51



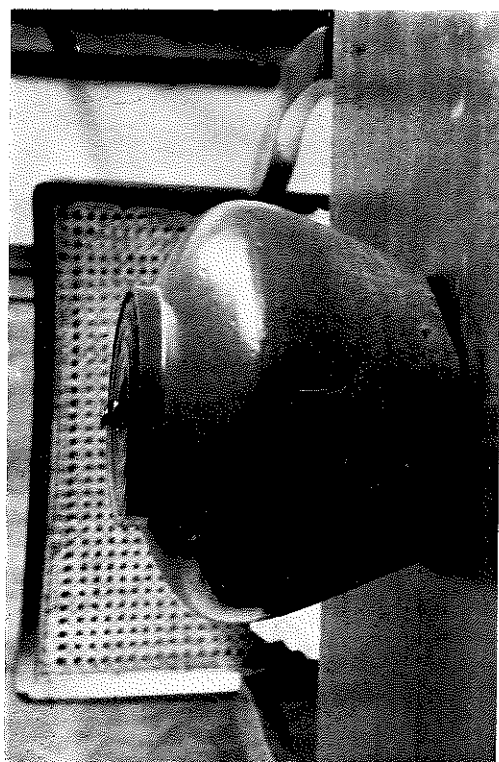
53



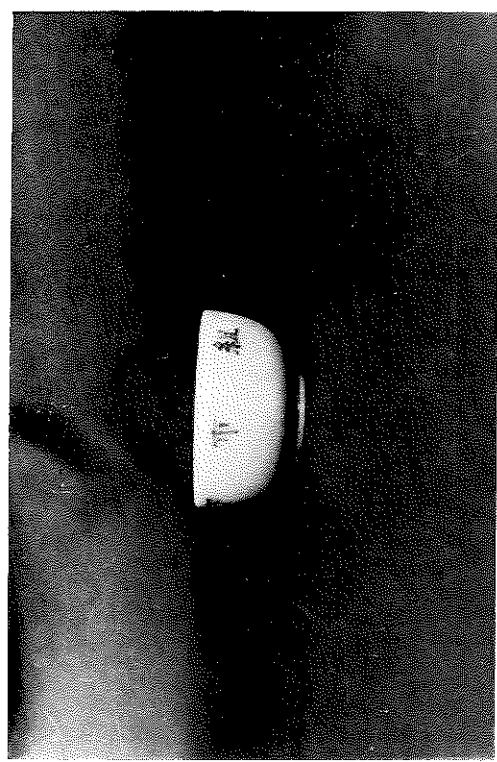
54



55



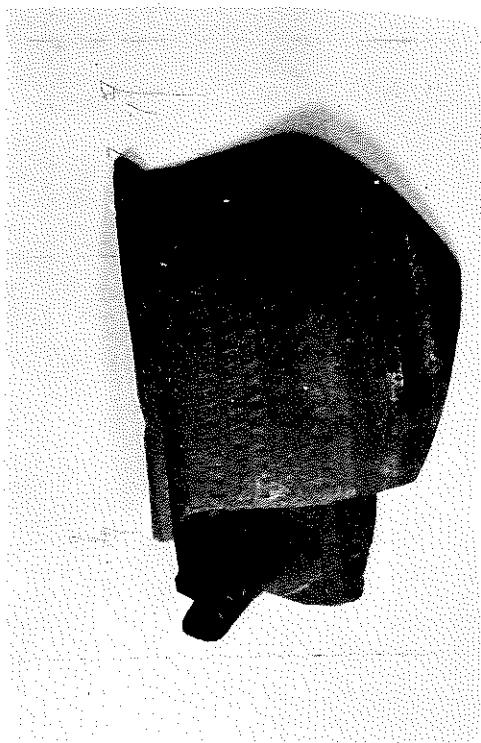
57



59



58



60



61



62



63

昭和45年12月20日印刷

昭和45年12月25日発行

編集兼
発行者

愛媛県今治市矢田西ノ窪688

今治明德短期大学

広島市十日市町2-3-23

印刷所

大学印刷株式会社

TEL (0822) 31-4231代

REPORTS OF RESEARCH IMABARI MEITOKU JUNIOR COLLEGE

No. 3

CONTENTS

A Finishing Touch on Personality Understanding Discrimination	···Kanichi NISHIMURA·····	1
The Structure of the Learning Process Aiming at the Dialectics of Recognition	·····Masahiro TAKEDA·····	13
EQUALITY, LIBERTY, AND DEMOCRACY·····	Sonboku OKUDA·····	27
Studies on the Cookery with Gelatin (Part 1)	·····Naoe TANGE and Hisami MURAKAMI·····	43
About the Progress in Rice Quality and the Consumption Trends based on the Production Adjustment of Rice in the Economic Growth Report 1·····	Yutaka MAKI·····	49
A Study on the Stonewares, Earthenwares, and Porcelaines that were matured in "NISHINOOKA KILN" at Shigenobu-cho Onsen-gun, Ehime Pref. (Part 2)	·····Masaaki NAGATA·····	63

December 1970

IMABARI MEITOKU JUNIOR COLLEGE